チベット語訳『妙法蓮華註』「方便品」和訳（1）

望　月　海　慧

1　はじめに

本稿は、身延山大学東洋文化研究所の法華経研究班による研究成果の一部であり、先行する「チベット語訳『妙法蓮華註』和訳」に続き、第２章の「方便品」の和訳を提示する。[(1)] 既出の和訳を提示すると次の通りである。

①「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13, 2013, pp. 1-22.②「チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳（1）」『身延山大学仏教学部紀要』, 2017, 印刷中. ③「チベット語訳『妙法蓮華註』「信解品」和訳」『大崎学報』173, 2017, pp. 37-80.④「チベット語訳『妙法蓮華註』「薬草喩品」和訳」『身延山大学東洋文化研究所報』19, 2015, pp. 77-103. ⑤「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』14, 2014, pp. 1-18.⑥「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳」『身延論叢』20, 2015, pp. 1-54.⑦「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19, 2014, pp. 35-58.⑧「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林, 2014, pp.（41）-（51）. ⑨「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39, 2013, pp. 1-15.⑩「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』６, 2014, pp. 7-22.

これらの和訳により、「序品」と「方便品」の一部と第４章の「信解品」から

第11章の「見宝塔品」までが終わり、残りは「序品」「方便品」「譬喩品」である。章の数としては、全11章中の３章となるが、この３章はそれぞれ全体の63パーセントになり、それぞれが全体の20パーセント程度ある。そのために、本章の和訳は稿を分けて掲載する。

2『妙法蓮華註』「方便品」の構成（前半部分）

今回の和訳箇所は、「方便品」の冒頭部分で、釈尊が三昧から立ち上がり、仏智は理解し難いことを述べ、シャーリプトラ説法を請願するも３度断られる三止三請し、増上慢の声聞が退座するところまでである。チベット語訳に基づいてその区分を行うと次のとおりである。

［１］如来のみが仏智を知る　［２］八甚深
［３］理解すべき正法　［４］方便と知見
［５］念観　［６］語義解釈
［７］円満な言葉　［８］相応しいもの
［９］無量の円満な相　［10］如来の一切法の知見
［11］二つの正しいこと　［12］二つの正しいことの区別
［13］福徳の拡大　［14］無上の甚深
［15］入の甚深　［16］二乗の不共
［17］舎利弗の不知　［18］知者たちの不知
［19］独覚の不共　［20］菩薩の不共
［21］鋭根の菩薩の不知　［22］信心の請願
［23］二乗への大乗の説示　［24］四衆の疑惑
［25］疑惑の意味　［26］疑惑の意味の確定
［27］舎利弗による疑惑　［28］世尊への賞讃
［29］菩提と涅槃を知ること　［30］世尊の三昧からの生起
［31］結果の獲得　［32］声聞による請願

［33］解説しないことの論難　［34］過去の如来による衆生利益
［35］説法に相応しい原因　［36］偈によるまとめ
［37］３つの論難　［38］法の解説の請願
［39］舎利弗による請願　［40］原因の成就
［41］自他による請願　［42］確実な授記
［43］増上慢の声聞の退去　［44］去った理由
［45］結果の異熟

まず、冒頭において「方便品」の名前が来意と、釈名と、出体の３項目により解説される。序品には名称が付されていないために、本章がその最初であるが、第３の項目については他の章と相違が見られる。

経文の解説部分では、冒頭の散文部分には［１］から［10］までが相応している。最初の偈頌部分が始まる［11］から［23］までにおいては、21偈の内容が細分化されている。そのうち、［５］の念観の解説では、漢文は多くの経論の長大な引用を行うものの、チベット語訳はその部分の翻訳を行っていない。また、［21］においては、漢文の【23】と【24】が１つにまとめられている。すなわち、引用の最初の「不退諸菩薩」は漢訳法華経では第16偈の最初の句であるのに対して、チベット語訳法華経では第17偈の最初の句である。このことは、全体の偈の数は同じであるにもかかわらず、漢訳では意味を解り易くするために、原文のパーダの順番を変更して翻訳していることに起因しているわけだが、そのために、玄賛のチベット語訳者は【24】に相応する部分を見失ってしまったのであろう。

続く散文箇所においても、［27］においても漢文の【30】と【31】が１つにまとめられている。このことは、【30】の経文の後半「難解之法」と【31】の経文の後半が同じであるために、チベット語訳者は同一の句と解釈して、【31】を省略したのであろう。

さらに、第２の偈頌部分の［30］においても漢文の【34】と【35】が１つに

まとめられている。ここでは、【34】の経文の前半「無問而自説」はチベット語訳では前の［29］の後半において引用されている。これは、同句が漢訳法華経では第24偈第３パーダであるのに対し、チベット語訳法華経では第24偈第１パーダである。すなわち、第24偈の前半と後半が漢訳とチベット語訳では反対になっており、玄賛では【34】と【35】に半偈と３偈をあてているのに対して、チベット語訳では前半を１偈と読むことで【35】の３偈を把握できなくなったのであろう。それ故に、チベット語訳では２つのセクションを１つにして、３偈を「その次に」の語に置き換えている。

続く偈頌部分の［32］においても漢文の【37】と【38】が１つにまとめられている。ここでは、【38】の経文の後半が第32偈の第４パーダに当たっているのに対して、［32］の経文の後半が第32偈の第３パーダとなっている。それ故に、チベット語訳者は第32偈の第４パーダを見失っており、２つのセクションを１つにしたのかもしれない。

また、チベット訳の［38］においても漢文の【44】と【45】が１つにまとめられている。この【44】に相当する第34偈は、直前の散文の繰り返しであり、内容が重複するために省略されたのであろう。それ故に、［37］において【43】と【44】が１つにまとめられたとすることもできるが、［38］の経文の前半は、散文の導入部分の「それからシャーリプトラは」ではなく、第34偈の導入部分の「それから世尊は」である。このことは、次の散文の導入句と混同したことで、【44】の翻訳が省略された可能性もある。

以上のように、セクションの省略は、鳩摩羅什が『法華経』の偈頌を翻訳する際に、パーダの位置を動かしたことに起因していることがわかる。このことは、玄讃のチベット語訳者が『法華経』のチベット語訳を並べていたことを示している。

3　チベット語訳テキストの和訳

これ以後は「方便品」を説き、それも、名付ける理由と、名称の注釈と、自性を説いたものである。ここでも、８章の本文を正しく註釈しており、蓮華が水から生じ、花が開く意味により正法の結果を理解することを示しており、一乗を示しても、２種の乗を求めてから３種の根のものが授記と疑惑を求めるので、譬喩と方便を種々示すことで「方便品」を説くことを意図しており、また19章が真実の典籍であることを示しており、この「方便品」以後の12章により一乗を説く所縁を示し、「安楽行品」と「従地涌出品」の２章により一乗の行が説かれ、「如来寿量品」と「常不軽菩薩品」をまとめた５章により一乗の結果が説かれており、所縁を説いたことでこの乗の未了義と了義を示してから声聞たちがそれを理解したことを授記している。そこでも、最初の８章により未了義と了義そのものを説いたことで３種の根が授記により得られ、３章により法と人を賞讃し、この経典に入り、１章により導いた意味を捨てて、了義に入るのである。注釈[(2)]に、これ以後は原因と結果の特徴を示しており、「序品」の解説に続いて本文が説かれるので、原因と結果を示す特徴が３種で、如来の知恵が無上の結果である。知恵の結果は、名付ける原因である。「未来に行く門から入るように説いたこの聖教にとどまり、真実の結果を受ける」と言う意味である。さらにまた、この経典自身の本文と方法を説いた真実の知恵の門を区別したものと、それを説いたものと、それを理解することと、それに入ることで、それ自身が原因と結果と見られる。三乗の典籍を聞き、一乗の在り方に入り、真実の結果を得ることが「法蓮華」の意味である。[(3)]

この名称の解説は、如来の知恵に２種あり、真実の知恵と瑜伽の知恵である。真実の知恵も、有為と無為の知恵の２つに区別され、ここでは無漏の知恵の根本と後得智の２つと結合している。瑜伽は、真実の知恵に結合し、入るので、世俗の知恵で、方便である。 その方便も自と他の利益の成就に結合し、その成

就に巧みであることが「方便」と名付けられている。それも、後に導くことと師と結びつけられる。例えば、経に、不浄な器を持って、不浄な服を着ることによる明らかな菩提は、身体の方便である。四諦などの法輪を廻すことと、大乗に入る経を示すとは、言葉の善巧方便である。過去の如来による所作に似て種々なる善巧方便を意図することは、意の善巧方便である。また、導くことの巧みな方便は、外の六行である。廻向に巧みな方便は、内の六行である。[4]

この自性は、智慧の自性で、無分別智である。また、後得智で、「利他のために正しい行をともなっているから」とも説かれている。[5]

［1］経に、「それから世尊は意趣をもって」と言うものから「すべての独覚は知り難い」と言うまでには、[6]これ以後の長行による詳細な解説と、偈によるまとめであり、説かれた意味は正法の意味を理解した如来だけが知っているそのことを示している。「世尊が意図し、お知りなられた通りにともなっている」とは、真実の知恵で見られ、三昧から起きることである。その三昧から起きることも、法に精通する意味で、世尊が三昧に入り、他者は起きることを請願できないが、世尊自身がそれから起きて、生じることと入ることに精通することを説いている。それから起きてから真実の意味をそのように述べられないが、「シャーリプトラよ」と呼んで、述べたことは、最高の智慧を聞くことで正しい法の最高の器になり、聖なる声聞たちを褒め讃え、この正法を聖者である声聞たちのために説かれ、声聞たちが大菩提に励み、無上の結果に入り、聖なる声聞たちは悲心が劣っているので菩薩に述べられた後にこの法に対して声聞たちは「福分がなく、意味を解説していない」と入ろうとしないので、シャーリプトラに仰ってから他の聖なる声聞もこの経に入ることに発心することと、見ることと、理解することが難いことは、知恵と知恵の門である。注釈[7]にも、甚深は２種で、理解の甚深と、教義の甚深である。理解は、智慧である。教義は、智慧の門である。「智慧」とは、一切智と一切相智で、一切智は領域を知ることである。一切相智は、有と無、有為と無為、有漏と無漏などの一切の相を心に

入れることである。智慧の門は、甚深なる教義で、如来が説かれた言葉と意味のそのすべての不可思議の法が五種の知恵の領域になっている。理解し難いことは、一乗は自性により無上なる甚深で、真実そのものの意味である。また、甚深は、事物が正しいことと、理解し難いことである。正しい事物は、５つの甚深なる分別である。理解し難いとは、声聞と独覚は知ることができないことである。５つの甚深は、意味の甚深である意味の差別と、自性の甚深である本質のためと、自証の甚深である真実の知恵の自証の知恵を他者は知ることができないことと、場所の甚深である法界の法性が如来の根本であることと、無上の甚深である正しい事物であることによる甚深である。[8]

［２］経に、「それは何故か、と言うのならば」と言うものから「知り難い法を知る者である」と言うまでには、[9]ここに本文に八甚深が生じることが説かれている。「何故にか」と言う質問が、三乗の解脱の獲得が同じならば、「いかなる特殊があるのか」と言うことで、これらの甚深により聖なる声聞より特殊であることが説かれているので、甚深の語義を八種説いている。「多くの仏に奉仕する」とは、受持され受持すること[10]と、読み、唱えることが甚深と説かれており、世尊は過去に三無数劫の間にガンガーの砂の数ほどの仏に奉仕して、聖教を受持したので甚深である。「菩提の行を行ずる」とは、明らかな成就が甚深なることを説いており、如来は、福徳と知恵の二資糧が円満なので、明らかな悟りを説いているが、声聞の原因の成就だけに尽きないと説かれているので、この甚深が説かれている。「精進の行」とは、結果の成就が甚深であることを説いており、勤勉な精進により貧困と疲労なしに成就していることによる正しい結果の獲得は、結果の甚深である。「珍しくて」とは、福徳を広げる心の甚深で、その菩薩は難しいことを行じ、努力を捨てない心がすべての方向で知られていることを他者が聞いて、珍しいことがとても知られている甚深である。「希有の法をともなっている」とは、正法により満足する心の甚深で、以前に得た正法が明らかになることで心の歓喜と信解が生じる甚深である。「知り難い法を知

る」ことは、無上の甚深で、それらの知り難い法は、如来だけが心に入るので無上の甚深である。「意図したものは知り難い」とは、入ることの甚深で、名称と言葉と意味はとても知り難いので、如来が自分で理解して、それも入り難く、述べ難いのである。入ることは、自分自身が入ることである。解説は、他者に解説し難く、その両者は「如来だけによる行」と言われる。「声聞と独覚は知り難い」ことは、場所の甚深が説かれており、内外の行が共通ではないことが説かれている。[11]

［3］経に、「シャーリプトラよ、如来」と言うものから「種々なる善巧方便と知見と因縁と所縁と語義解釈と」と言うまでには、[12]前に解説したものと理解すべき正法が説かれており、その次に如来が意図して示す法を説くことの功徳を解説し、如来が説く円満な原因である。「善巧方便と知見と因縁と語義解釈」と言うものは、後の語が前のものを解説しており、世尊が明らかに悟ってから衆生を導くためにそれぞれの場所でさまざまな譬喩と方便により法が説かれて、衆生を執着の場所から解放している。その最初の４語は、それぞれの解脱で、その次に言葉を３度だけ繰り返して述べられている。それも、如来の功徳の四種を完成させており、衆生を解放するために至り歩むことを説いており、善巧方便を円満にすることで、最初の兜率天にとどまることと、涅槃に至るまでの間に衆生にさまざまな利益をなされることが善巧方便である。「知見」とは、清浄な法の原因が説かれ、知見があるので清浄な法を見て、知ることに相応しくて、前には身体の門から衆生利益の所作が説かれて、ここでは種姓を解説する門から示している。「知見」とは、円満な功徳の究極が説かれており、説法において根に応じて何により導くのかを知り、見て、法を説くのである。「語義解釈」とは、四無礙解により適切に法を説いており、そこで最初に変化身による種々なる方便により法を示すことが説かれている。その次により清浄な法の種により衆生利益をなすことが説かれており、その次のものにより真実のとおりに法を説く究竟が説かれている。その次は、無礙解によりそれぞれの意に従う

法を説くことは、如来だけが理解していると説かれている。また、その４偈も、変化身と報身と法身と、究極の自信をもっているので「説く」と合わせられる。[13]

［４］経に、「相を説くことで真実を説いており、それぞれの方便により衆生がそれぞれに執着していることを明らかに解説している」と言うそれは、[14]その上の４語を何度も繰り返して、解放させ、解説しており、これを善巧方便により示しており、善巧方便は外道の種々なる方便により真実の説法に入れることに巧みなので善巧方便であり、それらの外道も善に入れ、疑惑を断ち、正しい知恵に入り、四摂事を集め、解脱を獲得させることによる善巧方便であり、上の４つと順序通りに合わせられる。また、種々なる方便により導き、執着から解放させており、界への執着と、地への執着と、方向への執着と、乗への執着である。界への執着は、三界への執着である。地への執着は、戒と制戒と禅定と三昧の地への執着である。方向への執着は、在家の方向と、出家の方向で、業と種々なる生活と利益と名声に執着することである。乗に執着することは、大小の乗の見解を最高とし、執着することである。[15]

［５］経に、「シャーリプトラよ、如来は」と言うものから「希有な法をともなって」と言うまでには、[16]上の「知見」により示し、「大」は無上で、「最高」は正しいことである。そのすべても、２種の知恵の衆会であり、障碍がないことは、四無礙解である。力は、十力である。無畏は、四無畏である。不共は、18である。根と力は、５と５である。菩提支は、７である。[17]禅定は、４である。解脱は、８である。三昧は、３である。等持は、９つである。それらの特徴と異門の解説は、経典と典籍から詳しく解説されるように。[18]

［６］経に、「希有な法をともなっている」と言うものから「正しく示すものである」と言うまでには、[19]語義解釈を説いており、注釈に[20]円満な師の７種を説いており、これが最初で、世間と出世間の諸法の甚深に入ることである。[21]

［７］経に、「シャーリプトラよ」と言うものから「しなさい」と言うまでは、[22]円満な言葉と、円満な名称と特徴を示しており、如来は耳に心地よい言葉で法

を説いており、それは雷のように甚深で明らかなお言葉で、清浄をさらに轟かし、聞く者たちに喜びが生じ、心に愛着して信と尊敬が生じるお言葉で、快い意味の理解しやすいお言葉で、耳が疲れずに法を区別することに巧みなお言葉である。円満な名称と特徴は「それだけで満足しなさい」と言われ、衆生で法の器になった者たちはすでに成熟しているからである。法の器も、真実と非真実との２種で、真実は、シャーリプトラなどである。非真実は、増上慢である。真実の法の器になった者は、聖者たちが正法の歓喜で心を広げるようになったので「最高」と述べられて、真実ではない法の器をもつ者たちも、「自分の聖なる心を得るだけで心解脱の法を得ることで足りていると考えることで満足している」と説かれている。[23]

［８］経に、「シャーリプトラよ、如来」と言うものから「珍しいものを獲得して」と言うまでは、[24]この解説に相応しいものを説いており、聖シャーリプトラなどの根が熟した者たちは希有な功徳の法を解説するのに相応しいので珍しいものを明らかに得ている。[25]

［９］経に、「シャーリプトラよ、それだけ」と言うものから「シャーリプトラよ、如来自身が知っている」と言うまでには、[26]無量の円満な相を説いており、如来蔵は、変化しないので法身の自性で、有為と無為の一切法を知るので無量の相を知るのである。それらの語により上に述べた善巧方便と知見などの語義は、経典自身による解放をともなっていると説かれており、順序どおりに合わせて、入れるべきである。[27]

［10］経に、「それらの法が何であり」と言うものから「如来自身が明らかにしており、明らかでないものはない」と言うまでには、[28]如来も一切法を明らかに見て、知ってから法を示している。その５種の語義を４つの答えで繰り返して、解説される。そこで「法は何か」と言うことは、三乗に入ることに導く意味を取り除いて、了義であるものに入ることで、それらの法はどのようなものかは、一乗に種々なる意味があることを示している。それらの法は何に似てい

るのかは、三乗の門に入る清浄な行を成立させることである。「特徴はどのようなものか」とは、三乗の１つの特徴を説いたものである。本質は何かは、究極には一乗に尽き、二と三の本質はないと説かれている。また、これ以後の偈とは別に、「解脱するならば、それらの法は何であるのか」と言うのならば、有為と無為の法である。それらの法はどのようなものかは、因と縁により生起したものと、因と縁により生起しないもので、そのうち因と縁により生起したものは有為法である。因と縁により生起しないものが無為法である。それらが何に似ているのかは、常と無常の法で、それも縁により生起しないものが常法である。縁により生起するものが無常法である。特徴がどのようなのかは、生と住と滅の法の特徴である。その３つの特徴をもつものは有為の無常法である。その３つの特徴を離れたものが、無為の常法である。本質が何であるかは、五蘊の本質と五蘊を離れた本質の法であり、五蘊は生などの特徴である。五蘊を離れたものは、無生などである。また、３つの解説は、その５語より最初の２つは上に解説したものと同じで、「それらの法は何に似ているのか」と言うものは、無自性で、縁起の法である。特徴がどのようなのかは、見られる者に相応しい特徴の法である。本質がどのようなのかは、五蘊の所取と能取の法で、集［諦］の本質や道諦により把握される。また、それらの法のを解説に４つある。法を示す行為に依ることで、解説について、「それらの法は何か」とは、名称と言葉と生じる資糧を解説する法である。それらの法がどのようなのかは、如来の諸法に依ることで、解説の法である。「それらの法は何に似ているのか」と言うことは、教化と教化される衆生である。特徴はどのようなのかは、言葉の声に依ってから入れることで、言葉の声に入る特徴である。本質は何であるは、本質のみに依ってから真実の法に入ることは不確定で、それに執着し、欲することもあり、法の本質も言葉の言説を離れた本質を考察することにより入ることが説かれている。[29]

［11］経に、「それから世尊はそのことの広大な意味を説かれた」と言うもの

から「誰も知ることはできない」と言うまでには[30]、これ以後の21偈を２種に分け、17偈半により、上の２つの正しいことが説かれている。その次の３偈半により信の心が生じる真実の意味を説くことが解説される。最初も２種に分けられ、上の２偈により２つの正しいことが説かれている。その次の15偈半により２つの正しいことの区別が説かれ、これが最初である。最初の偈により説くことの功徳が説かれ、その次の１偈により法の賞讃が説かれている[31]。

［12］経に、「以前に奉仕し、行じたことは」と言うものから「知り難く、見難い」と言うまでには[32]、これ以後の15偈により２つの正しいことの区別を説いており、それも２種である。14偈により正しい法が賞讃されており、その次の１偈により正しい法を説く者が賞讃されている。その最初も５種に分けて、最初の１偈により読み唱えることと、成就し行ずることの二つの甚深が説かれている。その次の１偈により結果を行じ、功徳を広げることで心の楽なる正しさを得て、３つの甚深が説かれている。また１偈により無上の甚深が説かれ、また１偈半により入の甚深が説かれている。また９偈半[33]により二乗と共通ではないことを保持する甚深が説かれており、これが最初である[34]。

［13］経に、「そのように行を行じ」と言うものから「それは何に似ているのかも見える」と言うまでには[35]、この１偈により結果の行により福徳を広げることを説いており、歓喜の心の正しさを得ても、精進を無数劫修行することで正しい結果を得て、何でも知り、見る正しさを得るのである[36]。

［14］経に、「それを私は知っている」と言うものから「その特徴は何に似ているのか」と言うまでには[37]、これにより無上の甚深が説かれており、「その本質と教義は何に似ているのかを如来は明らかに知っている」と述べられている[38]。

［15］経に、「それを説くことはできない」と言うものから「清浄なものは信にとどまっている」と言うまでには[39]、入の甚深が説かれており、名称と言葉と文字により法を説く如来の説法は入ることと知ることが難しいので入の甚深である。また、如来自身がこの甚深にとどまり、入るので、外道よりも勝れてい

ることが説かれており、外道のような者が自分の法を行じても、法性の無分別のようなものではなく、「甚深なる縁起は言葉の言説を離れており、衆生たちは入ることができないが、菩薩で堅固な信にとどまる者だけが知っている」と述べられている。「菩薩が初地にとどまって以後、四法を信じることを退かない者たちがこの法に耐えることで解説に相応しいが、他のものにはない」と述べられる。四法は、三宝と戒を信解し、退かないことである。[40]

［16］経に、「世間を知っている声聞たち」と言うものから[41]「彼らは領域がなく勝者の知恵に」と言うまでで[42]、これ以後の９偈半により二乗と共通ではないことが説かれており、とどまり、保持することの甚深と合わせられる。それも３種に分けられ、最初の４偈により声聞と共通ではないことが説かれ、２偈により独覚と共通ではないことが説かれ、３偈半により菩薩と共通ではないことが説かれている。長行からは、二乗と共通ではないことが瞬時に説かれ、偈頌からは、菩薩と共通ではないことも説いている。声聞と共通ではないことも、鋭根のシャーリプトラのような者と共通ではないことと、他の衆会と共通ではないことが説かれているうち、これは最初のものと合わせられる。「漏尽の聖なる阿羅漢の身体を得た知恵によっても作られない」と述べられている。[43]

［17］経に、「もしこれらの一切の世間において」と言うものから「その善逝の知恵を知ることはできない」と言うまでのこれは[44]、鋭根の聖者シャーリプトラの知恵でも知ることができないので、如来の知恵は知り難く、理解し難いことが説かれている。[45]

［18］経に、「もしあなたに似た賢者たちが」と言うものから「すべてが集まっても知ることはできない」と言うまでには[46]、「十方の智慧が鋭くなった聖シャーリプトラのような者と、さらに鋭根の者の知恵を一つに集めた智慧によっても知ることができない」と説かれている。[47]

［19］経に、「無量の知恵を私は知っている」と言うものから「その真実の意味は完全に知ることはできない」と言うまでには[48]、独覚と共通ではないことが

説かれており、独覚に対しても犀のように一人で住し、多くの者が並んで法を区別するところに入らないことが、一人で住して成就することである。法を区別することに入ることは並んで成就することで、解脱分が生じていないものと解脱分が生じたものの区別により分けられる。[49]

［20］経に、「新たに乗に入った菩薩たち」と言うものから「ここに彼らの領域はない」と言うまでには、[50]菩薩と共通ではないことが説かれており、菩提も、菩薩が知らないものと、偉大な菩薩[51]が知らないものとの二つで、これは最初である。「心を新たに起こした」とは、６つの功徳[52]を持っている。すなわち、「奉仕することと、意味を理解することと、述べることに巧みなことと、多くの衆会と、心が一つになったことによっても知ることがないのである」と述べられる。[53]

［21］経に、「不退転の菩薩たち」と言うものから「ここには彼らの領域はない」と言うまでには、[54]鋭根の偉大な菩薩たちも知らないことを示しており、不退転の第八地以上である。[55]

［22］経に、「甚深で、とても微細な法を知っている」と言うものから「長い間の解説も最高の意味である」と言うまでには、[56]これ以後３偈半により信心を起こすことを請願しており、それも、１偈半によりシャーリプトラに最高の意味が説かれ、請願されている。後の２偈により二乗により多くの衆会に方便による請願が説かれており、世尊の説かれたこれに対する信を起こしなさいということである。[57]

［23］経に、「廻向するこれらの一切の声聞と」と言うものから「三乗を説いたことは」と言うまでには、[58]２偈により二乗の衆会に大乗が説かれ、無上を捨てているので三乗が説かれている。[59]

［24］経に、「それからその衆会に」と言うものから「彼らはすべてこのように考えている」と言うまでには、[60]四衆の疑惑となったものが特に説かれ、世尊にその意味の解説を心で思うことである。[61]

［25］経に、「ああ、いかなる理由で、何故か」と言うものから「知り難い」

と言うまでには[62]、疑惑の意味が説かれ、「二乗と菩薩たちが知り難いその意味が実際に何であるのか」と述べられている[63]。

［26］経に、「そのように世尊は『解脱は１つである』と述べられている」と言うものから「知らない、と思う」と言うまでは[64]、これ自身が疑惑の意味を確定しており、涅槃の獲得までは、禅定の意味に疑惑をもち、聖なる声聞たちが甚深なる見解に入り、大涅槃に依るので、「知ることと理解することが難しい意味である」と説かれている[65]。

［27］経に、「それから長老シャーリプトラが」と言うものから「何度もその説かれたものを世尊がよく解説することを請願する」と言うまでには[66]、聖シャーリプトラによる疑惑を述べたもので、先に長行による請願で、その次に偈頌によりまとめた請願である。それも先に疑惑の意味を述べて、その次に疑惑を断つことを請願する。疑惑の意味は、三乗によるそれぞれの解脱の区別と、特別に存在するものも説かれている。三乗の解脱は１つで、「解脱の１座に坐っている」とも説かれており、その同じ原因に対して疑惑となっている。それは、智慧波羅蜜の知恵の特徴と、法身の不二から意図されたものと、大涅槃から３種が説かれているように適切に理解するべきである。「いかなる原因」とは、いかなる意味から導かれるかである。「何故に」とは、実体である。「如何なる実体から問われるのか」と言う意味である[67]。

［28］経に、「それから長老シャーリプトラ」と言うものから「それらの無量を私は得て」と言うまでには[68]、11偈を４つに分け、最初の３偈半により世尊を善巧方便と甚深の門から賞讃したもので、また、３偈により四衆の疑惑が説かれ、１偈半によりそのような疑惑を以前に聞いたことが説かれ、また３偈により世尊にもその意味を解説することが請願されている。それらにも、如来自身が意図し、知ることは甚深で広大で、障碍なく入ることが説かれている。「太陽」とは、世尊の功徳の譬喩で、その太陽が闇を取り除き、所作に入らせ、多くの鳥が歌い、激痛が起きたように、世尊が世間に生まれたことによっても無

明の闇を取り除き、福徳の所作をなすことを説き、多くの衆会に法を轟かせ、魔と外道は激痛を起こすのである。(69)

［29］経に、「菩提座で述べられて」と言うものから「質問されなくても説かれた」と言うまでには、(70)上の２偈により明らかな菩提と涅槃を知ることが説かれ、後の２偈により前と同じもので、二乗が知らない甚深なる知恵の行境を説いたものである。(71)

［30］経に、「自身のすべての行も述べられている」と言うものから「偉大なムニに受記を請願する」と言うまでには、(72)そのうち最初の１偈により世尊が三昧から起き、法性により轟かせたことと、その次に四衆の疑惑を説き、解放することを請願している。(73)

［31］経に、「どれほどの声聞が」と言うものから「しかも私に行を説いたのか」と言うまでには、(74)その結果を得ることは、結果そのものが明らかになったものか、原因が明らかになったものなのか。結果が明らかになったのならば、明らかな賞讃も何の目的があるのか。原因が明らかになったものならば、原因が成立することで今結果が始まっているので、衆会が獲得を確実に心に起こしており、それは了義ではないのでシャーリプトラには疑惑となっていることが説かれている。(75)

［32］経に、「最高の太鼓の音で明らかな声を出して」と言うものから「ああ、どのように行が円満にされようか」と言うまでには、(76)聖なる声聞の衆会が法の解説を請願し、後の衆会は法の解説を請願している。如来が説いた心から生じた息子が子宮から生じることなどを請願している。(77)

［33］経に、「そのように請願して」と言うものから「怒るであろう」と言うまでには、(78)ここで二つの部分に分けて、先に論難して、後に請願しており、これは解説しないことの論難である。また、解説し授記することも４種で、確実な授記などである。また、授記も３種で、過去時に衆会が善悪の何れかをなしたことを説いたものと、大士に悟りを授記することと、意図したものの意味を

確実に説くことである。また、注釈[79]に、四義に依って、心の確定と、授記の原因と、授記を受けることと、授記を与えることを請願している。心の確定には、如来の自性が確実に存在してから意図して、解説しないことを浄化している。恐怖に五種あり、損減による恐怖と、成就し難いがための恐怖と、顛倒の恐怖と、後悔による恐怖と、疑惑による恐怖である。損減による恐怖は、聞いた声による恐怖で、声聞の涅槃こそが真実の究極であると考え、大乗の涅槃を聞くことで両者を損ない、恐れることで、成就し難いことによる恐怖は、菩薩行を無数劫にわたり成就したことで初めて成就から心を変えて恐れることで、顛倒による恐怖は根が熟していない衆生で下品の種姓の者で、厚い煩悩で我と我所を取ることに執着する者に甚深なる法を説いたならば、顛倒を選んで恐れることであり、後悔の恐怖は、聖シャーリプトラのように小乗にとどまる心を恐怖し、恐れることで大乗に入るように。疑惑による恐怖は増上慢で、それも声聞の種姓には、確定した種姓と不確定の種姓の２つある。衆生の下品には、得てないものを得ようと思うものと、厚い煩悩をともなうものである。菩薩には、退転する者と不退転にとどまるもので、確定した種姓をもつ声聞は損減を恐れる。不定の種をもつものは、後悔により恐れる。得ていないものを得ようと思う者は、疑惑により恐れる。厚い煩悩の者は顛倒により恐れる。退転の菩薩は成就し難いことにより恐れる。不退転の菩薩は、恐怖を離れており、一乗の解説に相応しい器になっている。また、解説しないことの論難は、２種の人の利益で、如来蔵を確定した心と、成就し難いことを超えた心の２つであるから。また解説しないことの論難は、天と人などの利益を考察しないで恐れることと、多くの衆会が甚深なる意味を求めることに入ることと、尊敬と宝を思うことに入ることと、増上慢たちを教化するためである。[80]

［34］経に、「また長老シャーリプトラが」と言うものから「善逝に解説を請願する」と言うまでには、[81]過去の無量の如来たちが衆生利益をなしたことを説いており、この法の解説の請願に２つあり、先は長行による請願で、その次は

偈によるまとめで、これは最初である。[82]

［35］経に、「それは何故か、と言えば」と言うものから「信解と受持がある」と言うまでには、[83]これを説くことに相応しい原因が説かれており、「以前の如来を見るよい原因がある鋭い智慧で、明瞭な根が「甚深なる意味に巧みな衆会」と合わせられる。[84]

［36］経に、「それから長老シャーリプトラは」から「あなたが説いた法を求めるでしょう」と言うまでには、[85]偈によるまとめである。[86]

［37］経に、「それは世尊が」と言うものから「大きな崖を落ちるだろう」と言うまでには、[87]３つの論難で、聞く原因をもたない増上慢たちは、世間の四禅にとどまり、まだ得ていない阿羅漢の結果を得ようと思うが、死の時に「聖なる道はない」と言う恐れにより「地獄の大きな崖を落ちる」と言われる。[88]

［38］経に、「それから世尊は」と言うものから「薬と楽になる」と言うまでには、[89]法の解説の請願に３つあり、解説の請願と法の器に適する理由が述べられており、聖シャーリプトラ自身は前世も記憶しており、他の根も考察しているので法の器となる理由により請願している。[90]

［39］経に、「それから長老シャーリプトラがその時」と言うものから「彼らはあながた法を解説したものを信じるでしょう」と言うまでには、[91]４偈のうち最初の１偈によりシャーリプトラ自身は子どもの長兄である門から法の解説を請願し、その次の１偈半により「以前の如来による加持だけである」と他のことを述べて請願しており、その次の１偈半により自と他の両者から述べて請願しており、これは最初である。「二足の最高」とは、天と人の法の器になるものの中でその最高なので、世尊が二足の最高による説かれている[92]

［40］経に、「どこかであなたは常に過去の衆会に」と言うものから「あなたが解説した法を信じるようになる」と言うまでには、[93]原因の成熟から述べられており、法の解説の請願である。[94]

［41］経に、「これらは私に似た1200人で」と言うものから「それらの歓喜の

最高も起こすことを請願する」と言うまでは[95]、自と他の両者から述べて、法の解説を請願している[96]。

［42］経に、「それから世尊は」と言うものから「私はあなたに解説する」と言うまでは[97]、４種の授記のうち確実な授記で、許可して授記することで、それも先に２種の授記を述べ、その次に五濁と合わせ、４種の疑惑を求めており、これが最初である。すなわち、許可による授記も世尊が解説を許可することと、増上慢の者たちを除くことを示している。よく聞いて記憶することは、根を集めて聞いたことを把握することである[98]。

［43］経に、「世尊がこの言葉を説いた直後に」と言うものから「衆会はそこから去った」と言うまでには[99]、増上慢の者たちが去ったことが説かれている[100]。

［44］経に、「このように増上慢の」と言うものから「衆会がそこから去った」と言うまでには[101]、それらの増上慢の者が何故に去ったのかという論理が説かれている。得難いものは５種であり[102]、人の身体を得ることと、境の中に生まれることと、円満な根と、如来が世間に生じることを見ることと、正法の聴聞で、「これらの難しいことから獲得するのならば、増上慢のこれらの衆会は、何故に座を立って去ったのか」と述べられている。それは２種なので、罪過の異熟が厚く、増上慢となるから。すなわち、厚く大きな罪過は、煩悩の障碍と、業の障碍と、異熟の障碍とで、それ自身が自らの過失となっている。「その３つの過失の障碍により聖者の結果は得られない」と言われる。「慢心」とは、７種の慢心のうちこれは増上慢で、獲得していないものを獲得したと思い、誤った慢心をもつことである。「聖者の結果を獲得せず、無為を理解しないので器になっていないから立ち上がって去った」と合わせられる[103]。

［45］経に、「世尊は何も言わずにおられた」とは[104]、確実な結果の異熟が世尊の力でも空にされないことが説かれている[105]。

〈注〉

（1） 和訳箇所は、『丹珠爾（対勘本）: 中華大藏經』第69巻, pp. 555-578に相応する。

（2） この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 4b26: 自此已下示現所説法因果相應知. T. 1520, 14b13: 論曰自此已下示現所説法因果相應知

（3） 694b23-695a4: 略開三門一來意二釋名三出體來意有三一者依八品爲正宗中蓮華有出水開敷之二德妙法具果秀行竦之兩能又經下言今此經中唯説一乘故以破二會二歸於一乘爲法華之正主故三周説逗彼三根此品初説一乘爲利鶖子鶖子上根最初於譬喩品中領解佛爲述成授記乃至天子説偈竟是第一周譬喩品中舍利弗請我今無復疑悔下佛説譬喩利彼中根中根四人信解佛説藥草喩品爲重述成便爲授記是第二周化城喩品説往結緣化城不實利彼下根滿慈子領佛印述訖便授五百及學無學記是第三周自下更無説一乘處故但一乘是法華體今既衆集緣和警之已畢機器符會正可陳宗且法説一乘利上根性故序品後方便品來二者依十九品爲正宗中方便品下初十二品明一乘境安樂涌出明一乘行如來壽量至常不輕合此五品明一乘果説境令知乘之權實勸應捨權而取於實聲聞悟此遂便得記於中分三初之八品正明權實三根得記次之三品歎人美法勸募持行後持一品稟命捨權持行實法科初八品與前無別故序品後方便品來三者**論**云自此已下示現所説因果相此意從前序品之後明經宗旨所説因果體相相状此有三釋一云所説諸佛智慧爲果能詮智慧教門名因如門爲入室之所由故教爲顯理之處蓮華但説二義因果故即智詮二云三請已後明一大事開示悟入前三爲果後一爲因正是一乘之宗旨初揚智門之意欲發鶖子等疑令其固請説一乘故蓮華二義雖解**無量義經**果秀因開此亦未爽通理由此即以開示悟入爲果及因三云初智及門門因智果開示悟入三果入因教理行果俱法華故令識昔者教行方便説三今談乘體理果唯一聽三乘之教解一乘之理行三乘之因證一乘之果法華意也如前已釋此品具明經所説宗因之與果故序品後方便品

（4） 695a4-696a16: 來釋名者便方連反今爲去音佛智有二一眞實智二方便智眞實智有二一者實法二者實智實法亦二一體實謂有爲無爲二眞實謂眞如妙理實智亦爾一如體實智即觀體實無漏眞智對凡妄智不知名實智根本後得二智俱是二證眞實智唯正體智此有五對一對知妄名實智二對知事名實智三對知相名實智四對知詮名實智此之四種實智皆是唯觀第四眞智餘四所對如次皆是四世俗智五對知權智名實智謂一乘理智對知二權智此依證智以第四眞智對後三俗智若依趣入智以第三眞智對第三俗智方便智有三或四一進趣方便謂見道前七方便智進趣向果名爲方便所學有則曰方隨位修順宜曰便二施爲方便謂方便善巧波羅蜜多後智妙用能行二利故名方便此曲有三一教行方便言音可則曰方稟教獲安名便二證行方便空理正直曰方智順正理名便三不住方便莅眞入俗曰方自他俱利名便上三皆是第二施爲三集成方便諸法同體巧相集成故名方便且眞如中具恒沙佛法以智爲門以識爲門皆攝一切故**菩薩地**云此法善巧成是故名方便**十地**云總同成別異壞以總對別之方便也苞總有則曰方以少

含多名便四權巧方便實無此事應物權現故言方便謂以三業方便化也此對實智名爲方便利物有則曰方隨時而濟名便此體即於施爲中出更無別義故體唯三今此有三一接下方便唯引於下二顯上方便唯顯深妙三通彰方便遍於上下一接下方便者此經下云十方佛土中唯有一乘法無二亦無三除佛方便說又云正直捨方便但說無上道於前四中權巧方便也此乃有三一身方便執持糞器而著垢衣伽耶成道等是二語方便下云我此九部法入大乘爲本又趣波羅奈轉四諦法輪等是三意方便下云尋念過去佛所行方便力我今所得道亦應說三乘等是上同古佛下順有情**佛地經**云成所作智起三業化正與此同依此解云施爲可則曰方善逗機宜曰便**往生論**云正直曰方外已爲便方是方術便謂穩便便之方名方便二顯上名方便者**無垢稱**云有方便故解無方便故縛此經下云我設是方便令得入佛慧一切諸如來以無量方便度脱諸衆生入佛無漏智初設方便顯後佛智故即四方便中施爲方便理妙可則曰方巧用能顯曰便其義深遠其語巧妙便通教理方之便名方便三通彰方便下經大衆疑云何故世尊慇懃稱歎方便而作是言佛所得法甚深難解有所言說意趣難知方便是總下二句別佛所得法是顯上明今一實有所言說是接下彰昔三權又云佛悉知是已以諸縁譬喩言辭方便力令一切歡喜接下顯上二皆通故即十二種方便喜巧波羅蜜多隨應配攝方者統情機之法軌　便者濟物理之要宜方謂方軌方法便謂要便宜便情謂有情機謂機要統攝機情機要之軌法名方貫人貫法故物謂人物理謂道理濟益人物道理之要宜名便濟人益法故此言意顯濟人益法之軌則故言方便亦方亦便故名方便由此義推乃通三釋三種合是十二種方便善巧波羅蜜多隨應配攝**瑜伽**四十五說十二種中初六依内脩證後六依外成熟内六種者悲心顧戀了知諸行欣佛妙智不捨生死輪迴不染熾然精進外六種者令以少施等善感無量果令以少戒等力引大善根憎聖教者除其恚惱處中住者令其趣入已趣入者令其成熟已成熟者令得解脱此中接下即外成熟此中顯上即内成熟此中通彰合是内外一十二種十二種中爲成後四復脩六種方便善巧一隨順會通將爲說法先現軟美可愛身語令生愛敬於法起樂漸次爲說彼不解空密意言教一切諸法無性無事無生無滅如幻夢等如理和會彼經不說一切法體都無所有但無所執可說自性據第一義非其自性既彼性事都無所有有何生滅又如幻夢非如顯現又非彼事都無所有故說如幻令彼了知二共立要契見有來求先共立契令知恩德供養恭敬持淨戒等然後與之三異分意樂共立契已彼不速行以利益意先許不與先爲親友隨順化導彼不依學現憤恚相所作乖違詐不隨益此等權時外現棄捨非内意樂不爲救拔四逼迫所作有自在力於親屬等能正教誡不知恩德毀戒等者或斷所求驅擯訶捶令正脩習五施恩報恩於曾彼所有大恩德彼期酬報勸令脩善名大報恩六究竟清淨果道滿已住知足天乃至下生成等正覺令生欣樂。往生隨下請轉法輪廣爲饒益此中方便即是六中隨順會通會昔三權通今一實決擇唯識又說有二種一拔濟方便善巧即外六種二迴向方便善巧即内六種如其所應皆此所攝

（5） 696a16-b13: 出體性者方便乃智以慧爲性無分別智内眞境後得智中利他說法能起

方便之妙用故以後得智爲性唯識等説後五波羅蜜多皆後得智爲性故其能所詮性又各別因智爲顯今從根本故智爲性下釋本文第一周中有四初世尊曉喩次鶖子領解次如來述成後佛爲記別同中下根文各四故此四之中初一即方便品後三皆在譬喩品中佛曉喩中論判爲五初歎法勝妙分吾從成佛下第二歎法師功德分爾時衆中漏盡阿羅漢下第三大衆定疑分佛告舍利弗止止不須復説若説是事一切世間皆當驚疑下第四定記分舍利弗諸佛出於五濁惡世下第五斷疑分法爲佛師人由法以成德人爲能顯法假人以弘宣故初歎法妙後歎人勝諸聲聞等於自所證已爲決定聞歎所説遂有疑生故有定疑分佛心所爲先已定訖唱止邀其固請亦令惡人退席既爾分明解釋其義故有定記分衆人之内聞前所説又有疑者佛爲重解故有斷疑分遂成五分或分爲二初歎法及師妙衆遂疑生後佛更爲定記解釋衆復疑生重釋此疑故分二也一品之中今科爲四初二深先唱警察群生之心次四衆驚疑發揚鶖子之情三開斯實相啓彼權門四勸發喜心令欣作佛品末三行頌是

（6） 前稿と同じように、『法華経』の引用箇所に対して、梵（ケルン）、蔵（中村瑞隆）、漢（鳩摩羅什訳、『大正新脩大蔵経』）の該当箇所をあげておく。
［1］Skt. 29.1-3; Tib. 29.2-5; Chin. 5b25-27.

（7） この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 5a11-14: 言甚深者顯示二種甚深之義應如是知何等爲二一者證甚深謂諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂智慧門甚深無量故. T. 1520, 14b23-26: 甚深者顯示二種甚深義應知何等爲二一者證甚深謂諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂智慧門故

（8） 696b14-697c26:【1】經 爾時世尊至所不能知 贊曰二深先唱警察群生之心文中有二初長行後偈頌長行有二初歎所證所説法妙吾從成佛下歎如來身能證能説法師勝妙初中有二初總標勝妙後所以者何下釋斯勝妙初中復二初顯自在從定而起後告鶖子正陳所説安者徐也詳者審也**論**云以如實智觀從三昧安詳而起起已告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故觀無量義處定名如實智觀佛定殊勝入已餘人不能驚佛令從定起非佛自出餘不能令出故自從定起又顯於定中入出縱任得自在故即由二義故從定起雖是無量義處三昧多是第四禪功德勝故不告餘人獨告舍利弗者隨深智慧與如來相應故謂舍利弗聲聞之中最爲上品智慧利根一聞即解最先悟入佛凡説法必應機根由彼智慧最爲第一根法相符故名相應相應者隨順義非是智慧相似名爲相應根合佛法名相應故不告菩薩**論**有五義一爲諸聲聞所作事故妙法蓮華爲聲聞説聲聞所作捨於權乘非菩薩故二爲諸聲聞迴向大菩提故令其發心趣大果故三護諸聲聞恐怯弱故若告菩薩即諸聲聞謂此一乘非爲已分心生怯弱不能進脩今告聲聞令除此意是汝等分除怯弱心四爲令餘人善思念故令餘聲聞善思念之其舍利弗已蒙佛告我是彼流亦應被告深生信仰起脩學心五爲諸聲聞不起所作已辦心故昔諸聲聞謂所得滅果滿證圓所作已辦今歎法妙告彼不知令捨小心菩薩於五事全不相應故雖利根佛不正告傍告無爽告三乘人有疑悔者令皆斷故正告不定性兼任持所餘故所

歎之法略有二種一者智慧二智慧門故**論**云有二甚深一證甚深謂智慧二阿含甚深謂智慧門智慧門者即能詮教智慧甚深即所詮理梵云阿笈摩此名爲教或翻爲傳上古諸佛傳至今故此甚深義通教及理然理正得甚深之名門深乃稱難見覺等二乘不知亦通此二自餘別屬理教二法**論**意如此**論**說智慧者謂一切種一切智智義故一切智人之智名一切智智體通性相名一切種即佛果位涅槃菩提或一切智者無分別智重言智者是後得智義者境也即一切智智之境故名一切智智義何謂彼境謂一切種一切種者謂若空若有有爲無爲有漏無漏若教若理名一切種種謂種類法體種類衆多非一攝一切盡名一切種謂此一切種是一切智智之境即此一切種境名爲所詮之智慧也今以理窮智慧有五攝一切法盡方名一切種一智慧性謂眞如故下經云唯佛究竟盡諸法實相**論**自釋云如來藏性爲體攬法成人人之所成即是智慧故引下爲證二智慧相即無漏能觀正體後得二智爲體下云方便知見皆已具足盡思共度量不能測佛智等是三智慧伴塵沙萬德有爲功德是下云如來知見廣大深遠無量無礙力無所畏皆具足等是四智慧因謂能詮教及萬行是下云其智慧門難解難入**論**云阿含甚深又**論**引經云如來能說一切法種種言詞又云盡行諸佛無量道法等是五智慧境謂若空若有有爲無爲眞俗諦境下云如是相如是性等是今智慧門既是方便能詮教深故所詮理深即餘四慧義雖可爾然依諸教五甚深中多唯慧性眞如爲體以阿含甚深即昔三教故證甚深即一乘體無上甚深是大菩提故**勝鬘經**中說一乘體唯眞如故即化城品之寶所也今此經中依實勝慧唯取智性智相爲體菩提菩提斷皆名菩提智及智處皆名般若攝一切故火宅牛車即智相故牛車言作各與一故寶所舊有即智性故衆共取故示悟知見即是二故由此有故餘三自成下云一大事因緣即唯此二若因若果謂此智慧是一乘眞理其智慧門是三乘權教總標實權理教二別欲令二乘捨權取實行因證果故**勝鬘**由此說二乘等四智究竟得涅槃者是佛方便欲令捨二權而取一實故其證甚深**論**有二義一體妙二難了體妙者**論**云證甚深有五種難了者**論**云又甚深者一切聲聞辟支佛所不能知故其五甚深古來唯依眞如解一者義深差別義也二者體深自體性也三內證深正智內證餘智不得故四依止深法界法性諸佛本故五無上深體最勝故謂大菩提即是所證無上正等正覺果也若兼觀照智性智相合名五證義甚深者其義甚深謂正智如之用故體甚深者謂眞如法本性故內證甚深者重顯正智內冥如故所以名深依止深者重顯眞如一切德本所以名深無上深者謂大菩提大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提無著**金剛般若論**云無上菩提是法身理三藐三菩提是報身智故即通顯此之二種體過一切所以名深此爲本意若通義解或隨所應所詮四慧皆有義體證依四深或智慧相性伴境四法如次配初四種甚深唯無上深在大菩提諸德主故又非喩所喩思議所思議故名甚深上來解深唯在智慧不通慧門**准論**解經慧門亦有五**論**名總句阿含深故即五難是無量者智性智相智伴智境如其次第體遍用寬德備法廣如空無限德數無窮終必無盡故名無量然今但說智性智相二種智慧名爲無量體德作用皆具無限無窮盡故其門甚深亦有二義一體妙二難了體妙者**論**引經云其智慧門難見難覺難知難解難入具彼五難難了者二乘不知故一由

智義深故其門難見二由智體深故其門難覺三由智内證深故其門難知四由智依止深故其門難解五由智無上深故其門難入以教五難別配智慧五種甚深又智有二一凡二聖凡有二智一現二比凡現智不知名難見比智不知名難覺聖智有二一有漏二無漏有漏世俗智不了名難知無漏智有二一根本二後得初無漏智不知名難解後無漏智不知名難入入者證解今此經中唯有二無漏智不知故言難解難入總顯證教二難了云一切聲聞辟支佛所不能知唯佛能知故佛今所以歎二深者論自解云爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來説故爲下將説一乘眞實佛所得法甚深難解之由漸故先歎智深彰下所歎有所言説意趣難知二乘爲權之由漸故先歎門深令其發心希所聞也不爾唯應歎智慧深總攬萬德以成佛故

（9）［２］Skt. 29.3-6; Tib. 29.5-9; Chin. 5b27-c1.

（10）チベット語訳は、“gzung zhing ’dzin pa”とあり、所取と能取にあたるが、漢文には「受持」としかない。

（11）697c27-698b21:【２】經 所以者何至意趣難解 賛曰此釋前標阿含甚深此中有二初徵後顯所以者何者佛所得法所謂解脱三乘同坐解脱之床二乘亦得方便言教亦已依學如何今説此之二種二乘不知不見又此徵意佛之智慧二乘未得可名甚深其智慧門二乘已得何名甚深云二乘不知若依初解所以者何所得解脱三乘雖同般若法身相性智慧彼所未得汝定不知且智慧門彼亦未了故此以下但解阿含八種甚深欲顯二乘尚不能知教之甚深況佛智慧依第二解所以者何前徵教門深所以者今當具顯故此已下但顯教深**論**牒經有八句今此文唯六句**准論**應言佛曾親近百千萬億無數諸佛盡行諸佛無量道法勇猛精進名稱普聞成就甚深未曾有法難解法者如來能知隨宜所説意趣難解一切聲聞辟支佛所不能知加今經中第六句難解法者如來能知加第八句一切聲聞辟支佛所不能知故成八深第一句佛曾親近百千萬億無數諸佛者受持讀誦甚深此顯世尊經三大劫供養二十六恒河沙佛於彼諸佛所受持讀誦此法門故所以甚深非如彼二乘略即能解故名甚深第二句盡行諸佛無量道法者脩行甚深諸佛福智二利道行皆盡行故非如二乘略脩因故名爲甚深下皆准知第三句勇猛精進者果行甚深果謂果決精純勇捍堪耐勞倦所作皆成名爲果決或由精進所作善成今獲勝果名果甚深一句投火半偈捨身六年苦行七日翹足非不專精懃勞得故第四句名稱普聞者增長功德心甚深由名遠振凡聖普聞勗勵已身懃加脩斷自功德心倍加增長或名遠振他聞之故皆悉增長功德之心一切聞知故成甚深第五句成就甚深未曾有法者快妙事心甚深由所成法是未曾有快妙勝事能成之心亦爲快妙快妙心説故教難知第六句難解法者如來能知者無上甚深由極難解法如來能知故此法門得成無上或難解法體即無上唯佛能知故是甚深第七句隨宜所説意趣難解者入甚深入甚深者名字章句意難得故佛自住持入解此意不同外道自不能解何令他解説因縁法極甚深故入有二義一難入解佛自解故二隨宜所説令他入法故意趣難解名爲甚深第八句一切聲聞辟支佛所不能知者不共聲聞辟支佛所作住持甚深不同二乘所作外利所作内利住持故成甚深上來總説

由近諸佛受持讀誦脩行果決增長功德心證快妙事成無上法故隨宜說難可得解二乘不了其智慧門名爲甚深難解入故況佛智慧非甚深哉

（12）［３］Skt. 29.7-9; Tib. 29.10-12; Chin. 5c1-2.

（13）698b22-699b8:【３】經 舍利弗至種種譬喩 賛曰上歎所證所說法勝妙下歎如來能證能說法師勝妙依論牒經次下應云何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便種種知見種種念觀種種言詞此上爲總下釋上言舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生令離諸著等展轉意言由如來身於所證理成就自在說因圓滿是以今說所證智慧及智慧門二皆甚深何等名爲說因成就謂種種方便種種知見種種念觀種種言詞此中初三合名因緣因緣道理也言詞名譬喩言詞多說諸譬喩故**准論**解經譬喩以上名爲總句廣演以下名爲別句展轉訓釋論有三解初論自別釋初四句次**論**以經下諸句兩番配此四句其後二番中初三義一處明第四義一處明初番別解云如來成就四種功德故能化度衆生一往成就謂種種方便從兜率天退乃至示現入涅槃故能往十方起難思化八相成道利益衆生權巧智用故名方便八相者**大般若經**第五百六十八卷說一從兜率天沒即入胎相二嬰兒三童子四苦行五成道六降魔七轉法輪八入般涅槃何故示現八相者彼經云爾時最勝天王復白佛言云何菩薩行深般若爲度有情示現諸相佛告最勝甚深般若相不可得諸菩薩相亦不可得但由方便善巧威力爲有情類示現入胎乃至涅槃種種化相諸天計常謂無墮落是故菩薩爲破彼執示現入胎因令彼天起無常念世間最勝於欲不染尚有墮落況餘天衆而得常耶故勿放逸勤加精進繫念脩道如見日輪尚有墮沒即知螢火不得久住復有諸天放逸著樂不脩正法恣情遊戲雖與菩薩同處天宮不往禮拜不諮受法各作是念今旦受樂明詣菩薩當受法寶共相謂言我與菩薩常此同住修行何晚是故菩薩如救頭燃破放逸行示現墮落如是示現有二因緣一令諸天離放逸故二令有情咸得見故乃至第八復有諸天人樂聞圓寂菩薩爲彼示現涅槃**攝大乘論**第九卷中有少差別**華嚴經**中示現十相皆廣如彼二教化成就謂種種知見示現染淨諸因故由具知見於化身中能示現有一切染因集能招苦一切淨因道能證滅或示現染淨諸法道理因者所以道理義故前能現身此於身中示有諸法染淨道理**論**下解此與第四別此依證法彼依說法故三功德畢竟成就謂種種念觀以說彼法成就因緣如法相應故此意說言以說種種念觀等法彼念觀等佛皆成就如所說法本末因緣皆相應故言相應者契會證義四說成就謂種種言詞以四無礙依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故依何等者何等義也即義無礙解何等名字章句者何等之名字章句法無礙解也隨何等者隨何等方衆生言音而爲說故即詞無礙解何等衆生能受爲說者何等衆生根器能受佛便爲說辨才無礙解也此四之中第一能起化身八相成道第二能示現有染淨諸法道理第三如所說法皆畢竟得第四具四無礙由佛法師具此四種說因成就成勝妙故其所說法亦爲勝妙**論**解四句已重解第二句第四句差別云教化成就依證法故說成就者依說法故依自所證苦集滅道染淨道理次第爲他說名第二教化成就依說法說義法詞辨次第爲他說名第四說成就皆無亂故

或前四種第一句是化身德第二句是報身德第三句是法身德第四句四辨具足由此三身四辨具足故能起說三身具故智慧甚深四辨具故慧門甚深故此因緣即前三種方便知見念觀三也譬喩即是種種言詞

(14) ［４］Skt. 29.9; Tib. 29.12-13; Chin. 5c2-4.
漢文はこのセクションを２つに分けて（5c2-3, 3-4）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［４］＝【４・５】）。

(15) 699b09-c9:【４】經 廣演言教至令離諸著 贊曰上依論文一番別釋總四句已**論**復第二以下經句配此四句此即第一種種方便次下所以者何如來方便知見波羅蜜皆已具足爲第二種種知見次舍利弗如來知見至解脱三昧爲第三句種種念觀次深入無際乃至本末究竟等爲第四句種種言詞**論**雖以下經文別配上總四句然初以兩番釋上三句已復以兩番釋後一句彼論文長乍披難解應依此讀此中初番釋云復有義種種方便者示現外道邪法種種過失諸佛正法種種功德故如經舍利弗吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脱文雖少異大意亦同釋無數方便更有四番一方便者方便令入諸善法故二斷諸疑故三令入增上勝智故四依四攝法攝取衆生令得解脱故此六釋中迴邪入正進善破惡自入勝智令他解脱如次配之以此方便引攝將導一切衆生令離諸著著者執本愛染生死之根本故**論**云諸著者彼彼處著或著界著地著分著乘著界者著三界著地者著戒取三昧初禪定地乃至非想非非想滅盡定地即以九次第定爲地戒取見取執此三昧故名著地著分者著在家分已同類作種種業邪見等故著出家分名聞利養能起種種覺察煩惱等故著乘著聲聞乘樂持小戒求四果等故著於大乘著利養供養恭敬等故由著分別觀種種法相乃至分別佛地故
699c10-22:【５】經 所以者何至皆已具足 贊曰此第二句**論**初番云復種種知見者自身成就不可思議境界與聲聞菩薩故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸故到彼岸者勝餘一切諸菩薩故文少不同義意無別知見者眞俗二智體根本智名知後得智名見方便者此智妙用方便善巧由自成就不思議境界故具知見與聲聞等名爲方便波羅蜜者到彼岸義明佛成就二勝智體故能成就不可思議境界已到彼岸勝餘一切由具方便二智妙用復能令他到於彼岸故能以此不可思議境界知見亦與聲聞菩薩

(16) ［５］Skt. 29.10-12; Tib. 29.13-17; Chin. 5c4-6.

(17) チベット語訳者は、漢文の「三十七菩提分」を、その構成要素の１つである「七覚支」と読んでいる。

(18) 699c23-403b9:【６】經 舍利弗至解脱三昧 贊曰此第三句**論**初番云復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脱三昧三摩跋提皆已具足故文意大同多少有別今言知見廣者無邊大者無上深者難測遠者時長窮未來故。此上乃是諸德總句二智爲性故云知見又此諸德亦是二智眷屬所攝故云知見無量已下諸德別句依此經文無量者四無量即**論**牒經無障也無礙者四無礙解力謂十力無所畏者四無所畏**論**本牒經中不共法十八不共法也根謂五根力謂五力

菩提分謂三十七此上四種經本所無禪謂色界四靜慮定謂四無色定解脱謂八解脱三昧者謂三三昧三摩跋提謂九等至此之一種經本亦無論牒經中有十三門今此經中合有八門功德名爲念觀體即明記之慧解故不可廣解義門各應略爲分別四無量以五門分別一列名二釋名三辨行相四出體性五辨差別列名者謂慈無量悲無量喜無量捨無量釋名者一緣無量境緣一切有情起此四故二起無量行行解亦復極廣大故三感無量果得大梵福成如來故名爲無量四者是數帶數釋也辨行相者法界有情總爲三類一無苦無樂者無倒與樂名慈無瞋爲體二有苦者拔苦名悲不害爲體三有樂者助喜名喜不嫉善根爲體復於無苦無樂者起離癡想於有苦者起離瞋想於有樂者起離貪想平等欲令離諸惡故名捨令捨惡故善捨爲體出體性者合以三法謂無瞋不害及捨不嫉體即無瞋無別法故辨差別者此各有三一有情緣作有情想二者法緣不見有情唯作法想三無緣復於諸法離分別心作眞如想故名無緣或法無量緣諸教法此三之中初共外道次共二乘後唯菩薩初三安樂後一利益感果可知與大慈大悲大喜大捨有差別者彼唯實觀唯佛所起緣三界生并無癡俱此通假實通凡聖起緣界不定非無癡俱四無礙解以三門分別一列名二辨相三出體列名者一法無礙解二義無礙解三詞無礙解四辨才無礙解辨相者法謂能詮名句文教義謂所詮眞俗諦理詞謂諸方音聲辨才謂七種辨才緣此四智無所拘礙名無礙解有多差別如**決擇菩薩地**及**十地論**説出體者此四即以無漏後得智爲體非證眞故義無礙解亦通正智初地分得九地任運離障圓成佛果滿足十力略以五門分別一辨名二出體三行相四次第五諸門辨名有二一列名二釋名列名者一處非處智力二自業智力**大般若**五十三名業異熟智力三靜慮解脱等持等至智力彼名靜慮解脱等持等至雜染清淨智力四根勝劣智力五種種勝解智力六種種界智力七遍趣行智力彼名遍行智力八宿住隨念智力九死生智力十漏盡智力釋名者初總後別總名力者能摧怨敵義不可屈伏義**瑜伽菩薩地**第四十九五十及**決擇**五十七**菩薩藏經**第五**顯揚**第四**對法**第十四**大般若經**皆釋此相與一切種利樂有情功能相應畢竟勝伏一切魔怨大威力故説名爲力故以威勢能摧難屈名力**對法**云善降衆魔善記問論故名十力十者是數力用不同有此十種故名十力依六釋中帶數釋也釋別名者因果相當名之爲處若不相當名爲非處故**瑜伽**云淨不淨果非不平等如實轉因是名爲處處者建立義依義起義能建立果爲依能起於果法故因立處名不平等因與上相違是名非處於此二種一切智無滯智清淨智離增上慢名之爲智力義如前各自所作三世三業或順現受或順生受順後受不定受名爲自業於此正知名自業智力此於善惡業異熟果中而生智解亦名業異熟智力靜慮者四靜慮解脱者八解脱等持者一切有心定等至者一切有心無心定於此正知名靜慮解脱等持等至智力此等諸定通有漏無漏加名雜染清淨根者信等五根此奠中上名爲勝劣於此正知名根勝劣智力若從他信以爲其先或觀諸法以爲其先成奠中上愛樂勝解名種種勝解於此正知名種種勝解智力若廣建立種種姓或一乘或三乘或四乘或五乘或貪瞋癡等分行等乃至有情八十千行名種種界界是姓故於此正知名種種界智力若即如是諸趣門中隨順正行如貪行者修不淨觀等名遍趣行或趣一

切五趣之行或諸外道沙門婆羅門各各異見品類諸行或此世他世無罪趣行名遍趣行於此正知名遍趣行智力能於遍行諸趣之行而了知故亦名遍行行若於種種有情衆中四方名字假設安立品類差別隨先過去所有自體八言説句一如是名二生類三種姓四飲食五受苦樂六長壽七久住八壽量邊際於此八中隨念六種略所行行有無量種宿住隨念六略行者一呼召假名二刹帝利等色類差別三父母四飲食方軌五興衰六壽量此等宿住是過去境住宿世故於此宿住而起隨念念俱行智名宿住隨念智力諸有情類臨欲終沒名爲死時住在中有名爲生時於善惡趣死時生時皆能正知名死生智力一切諸法漏及隨眠無餘永斷名爲漏盡於此正知名漏盡智力智者是體力是作用然智即力更無別性此中宿住隨念相應智力是隣近釋自餘最初處非處乃至漏盡是所觀境智力是能觀智處非處乃至漏盡之智力皆依主釋宿住是境隨念相應智力是能觀亦依主釋二出體者**決擇分**五十七云佛具知根慧根爲體**對法論**云若定若慧及彼相應諸心心所**菩薩地**云謂總五根爲其自性雖復三文不同然體有五一最勝體故決擇分佛具知根慧根爲性二引生體故**對法**云若定若慧三剋實體**菩薩地**云五根爲性由慧勝故且説十力慧爲自性所以但言處非處等智力不言信力精進等力依此即會決擇文訖四相應體**對法**又云及彼相應諸心心所四蘊爲性五眷屬體五蘊爲性定共道共無漏色等助爲體故此雖無文理必應爾遮犯戒垢助摧怨故餘之三門如**無垢稱疏**第二卷説四無所畏以五門分別一辨名二出體三行相四次第五諸門亦如**菩薩藏經**第五**大般若**五十三**顯揚**第四**瑜伽**五十**對法**十四辨名有二一列名二釋名列名者一正等覺無畏二漏盡無畏三障法無畏四出苦道無畏釋名有二一總二別總者四是數名無所畏者於此四處能自了知坦然無畏心無怯劣無所疑慮都無驚懼故名無畏別名者正覺諸法等覺諸法名正等覺諸煩惱漏種現俱斷故名漏盡説障礙法染必爲障故言障法説出離道諸聖修習決定出苦名出苦道於此四中得無所畏皆依主釋出體性者五十七云以信進念定慧及具知根爲性**對法**云若定若慧及彼相應諸心心所又言若起作用後得智爲性若住自性正智爲體此體有五據勝二智爲體發起定慧爲體談實五根爲體相應四蘊爲性眷屬五蘊爲體行相者如經言世尊自稱我是正等覺者復有沙門或非沙門從他方來佛慰勞言安樂住不乞食得不遂於此中有立難云言正等覺無所未知今問於他一何相返我於此難正見無由得安穩住無怖無畏自稱我處大仙尊位所以者何攝受來者令發勝心聞佛慰問發道心故欲令諸人審諦於事佛知尚問況餘不知亦爲後人作其軌範見來發心應爲引攝非佛不知仍言等覺又如經言我諸漏盡後時天授行諸惡行佛常罵之執日調順佛常耎語遂有難言言諸漏盡煩惱並亡呵叱天授愛語執日貪瞋未滅漏寧盡耶一何乖返我於此難正見無由得安穩住無怖無畏自稱我處大仙尊位天授譬之惡馬楚毒方調若不叱呵返言怖我執日喻之慧象隨逐人心故以耎言即能調順非有貪瞋漏不盡也又如經言佛爲弟子説障礙法染必爲障復不遮彼預流一來有妻子等遂有難言染必爲障聖畜妻子一何乖返我於此難正見無由安穩無怖處大仙位邪行障諸聖道畜妻障離欲道初二果人既未離欲性戒久成故除邪行不斷妻子斯有何失故諸染法非不障也又如經言我爲

弟子説出離道諸聖修習決定出離決定通達復有無學迦留陀夷埋足糞壤鴦掘魔羅獄火焚身遂有難言聖道久脩望離衆苦無學既還受苦何用修道之爲一何乖返我於此難正見無由安穩無怖處大仙位實得無學苦果定亡爲現因必有苦報由此聖者有現受苦起後教故或苦異熟無學不受惡業盡故有必障果不成無學彼言無學受彼苦者現居有學猶未離欲定成無學故與其名縱得神通非不還等世五通故或無學苦非是業招諸異熟苦必已出故如**涅槃經**第二十九解三時業至無學位排諸惡業一切不受説未入聖名爲定業其入聖已不名定業廣如彼説故阿羅漢定無苦果後之二門亦如無垢稱第二卷疏禪謂色界四靜慮謂初有尋有伺靜慮第二離尋伺喜第三離喜樂第四已離喜樂捨念清淨靜慮定是四無色謂空處識處無所有處非想非非想處解脱謂八解脱以三門分別一列名字二顯行相三出體性列名字者依**瑜伽**第十二十五七十三**攝事分**第四并**對法**十三**顯揚**第四第二及第二十**菩薩藏經**第四等説一有色觀諸色解脱二内無色想觀外諸色解脱三淨解脱身作證具足住四空無邊處解脱五識無邊處解脱六無所有處解脱七非想非非想處解脱八想受滅解脱身作證具足住顯行相者**俱舍**第二十九説内有色想觀外諸色名初解脱内未伏除見者色想觀外諸色以爲不淨名觀外色今則不然**准對法**文初修業者身在欲界已離欲界欲未依無色定伏除見者色想未離色界欲故若久習業已離色界欲見者色想安立現前而觀欲界一切所有内外諸色作光明想由前三解脱引發勝處遍處等故即觀勝處所攝少多等色作光明想由除變化障故作光明想不除貪欲故不作不淨想**瑜伽**唯云未得無色定未離色界染觀外諸色是初解脱者唯依初業説故第二解脱俱舍論説内已伏除見者色想唯觀外境而爲不淨名内無色想觀外諸色大乘不然**准對法**云久習業者已依無色定伏除見者色想初習業者見者無色想安立現前而觀外色作少多等想不同於初觀内外色皆作光明未自在故今此唯觀已離欲色作少多等名觀外色已離染故立以外名觀心漸勝故稍略觀故**瑜伽**云又不思惟彼想明相但於外色而作勝解即觀少多等不作光明等若於是處已得離欲説彼爲外故唯觀彼已離染色名之爲外又由初解脱觀色不言外其内有色亦不言内通緣内外根塵等色作光明想故今此第二内有色有根等色故其觀外色唯觀外塵作少多等不緣根等作少多等故**瑜伽**又云無色界定不現在前者此説觀外色不依無色定無色定不能緣外色故或已離色界欲不依無色定伏除色想但依色界定見者無色想而現在前故作是説上二解脱初作光明想後作少多想初寛後狹兩觀有殊**顯揚**二十説此二解脱除變化障爲於變化得自在故變化既通四靜慮有故初二解脱通依四靜慮初作多依初二定有但在根本非近分地彼欣趣脩都無通果此容預脩有通果故不同俱舍初二靜慮能除欲界初靜慮中顯色貪故作不淨觀第三解脱**俱舍論**説清淨相轉作淨光明鮮行相轉故唯第四靜慮離八災患心澄淨故餘地雖有相似解脱而不建立非増上故今者大乘謂如有一已得捨念圓滿清白以此爲依修習清淨聖行圓滿於内淨不淨諸色已得展轉相待想展轉相入想展轉一味想是第三解脱行相謂待諸淨色於餘色中謂爲不淨非不相待若唯見一類淨與不淨二覺無故是名初想又於淨中不淨性所隨入於不淨中淨性所隨入由　於被障薄

皮所覆共謂爲淨之中現有三十六種不淨物故是第二想如是展轉總一切色合爲一味清淨想解是第三想乃名成就唯第四靜慮地有捨念淨故**論**説超過諸苦樂故一切動亂已寂靜故善磨瑩故餘地不然故唯第四此亦内無色想而觀外色由前已説故略不論而立異稱次四無色解脱**俱舍論**説以四無色定善爲性非無記染已解脱故亦非散善性微劣故近分解脱道亦得解脱名無間不然所縁下故彼要背下地方名解脱故多説根本者近分非全故今者大乘皆已離自地欲依自根本地重觀自地境思惟勝解令障更遠引生勝德謂如有一於彼空處已得離欲即於空處思惟勝解是名空處解脱行相於彼識處已得離欲即於是識思惟勝解是名識處解脱行相於無所有處已得離欲於識無邊處思惟勝解是名無所有處解脱行相空識二名自地所縁行相爲稱無所有處以識無有爲自地名故於識處思惟勝解於有頂地已得離染更不於餘而作勝解乃至遍於想可生處即於是處而作勝解無所有處名想可生處今縁此無所有心心所名非想非非想處故遍於此思惟勝解至下當知上説離染依無學説故**瑜伽**云前七解脱於已解脱而生勝解身證者得若依唯識有二師説一云伏初定已上染得滅定二云伏第四定已上染得滅定無所有處已下染可有伏義令障轉遠引生勝德有頂一地定未能伏故**瑜伽**第十二空識二解脱有説離自地染言上之二地無説離自地染字有學無學影略説故唯在根本亦非近分滅盡解脱大小俱説即滅盡定而無行相棄想受故然將入時有二行相謂依非想非非想處及無相界想初脩久熟二入明故出體性者**俱舍論**説前三無貪性眷屬五蘊性次四無色定善爲性第八滅定性大乘之中七十三卷解五法中云世間出世間正智爲體有漏者以分別中世間正智爲體無漏者即無分別智及後得智唯慧爲性縁色非色及眞如境離諸定障引生勝德非餘能故若相應體初七以四蘊爲性眷屬五蘊性故**對法**云若定若慧及彼相應諸心心所無色界中計有定道無表色故第八解脱以二十二法種子上厭心功能爲體即不相應行蘊所攝三昧梵語此云等持即三等持謂空無相無願三等持至下當釋**般若**五十三三境俱同俱縁空故然依論引經更有五德恐繁不述**論**重釋上三句中復第二番釋次上三句云又第一成就可化衆生依止善知識故謂能引導有菩提性可化衆生未發心者令依善友離諸著故名爲方便引導衆生第二成就根熟衆生令得解脱故謂令久脩已發心者得解脱故名方便知見波羅蜜第三成就力家自在淨降伏故謂佛内成種種功德是故外能屈伏煩惱蘊死天魔名之爲力其禪定等皆是世尊所栖止處名之爲家由力自在故能降伏由家自在故淨諸障又由栖止禪定等爲家故得自在神通業等由成無量無礙力等故能淨諸障降伏外道等名如來知見廣大深遠依論本重兩番釋經上三句已次以經下七句釋上第四標句種種言詞亦兩番解初配經後重釋

(19) ［6］Skt. 29.12; Tib. 29.17-18; Chin. 5c6

(20) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 6a01-3: 第四成就復有七種。一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故. T. 1520, 15b07-10: 第四説成就者有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故

（21） 703b10-15:【７】經 深入無際至未曾有法 賛曰以七句釋第四言詞此經唯有初之五句第六句闕。第七句少至文當悉**論**云第四説成就有七種此即初句種種成就理事空有世出世間未曾有法皆深入故洞曉無涯故能起彼種種言詞際涯畔也

（22） ［７］Skt. 29.12-30.1; Tib. 29.18-19; Chin. 5c6-9.
漢文はこのセクションを２つに分けて（5c6-8, 8-9）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［７］=【８・９】）。

（23） 703b16:【８】經 舍利弗至悦可衆心 賛曰此第二句**論**名語言成就佛得五種美妙音聲説諸法故**大智度論**説五種音聲從佛口出一甚深如雷二清徹遠聞聞者悦樂三入心敬愛四諦了易解五聽者無厭能辨有漏無漏等義甚深如雷名種種分別諸法諦了易解名巧説諸法諸法之言通上分別慈悲愍念聽者無厭名言詞柔軟清徹遠聞聞者悦樂入心敬愛名悦可衆心初三各一後一攝二
703b26-c10:【９】經 舍利弗至不須復説 賛曰此第三句**論**名相成就然論牒經無取要言之以下佛悉成就以上文唯有止以下文**論**云有法器衆生心已滿足故名相成就法器有二一眞二假眞即舍利弗等假謂增上慢者爲眞法器衆生聖心已滿者心樂妙法唱止現相令其邀請佛今所唱止不須説何等法耶爲假法器衆生自謂聖心已滿足者心不樂法在座未去唱止現相令其起去諸法解脱我已得訖更有何法止不説耶故名爲相如世間人共會一處亦有樂聞不樂聞語時能語言止不須説説之何益令樂者請話不樂者起去今爲前眞者令問取一乘故名爲相

（24） ［８］Skt. 30.1-3; Tib. 29.19-20; Chin. 5c9-10.

（25） 703c11-15:【10】經 所以者何至難解之法 賛曰此第四句**論**名堪成就本無徵詞一切可化衆生知如來成就希有功德堪能説法故謂舍利弗等善根熟者名可化衆生知佛成就第一希有難解功德堪説法故

（26） ［９］Skt. 30.3-4; Tib. 30.1-2; Chin. 5c10-11.

（27） 703c16-704b1:【11】經 唯佛與佛至諸法實相 賛曰此第五句**論**名無量種成就説不可盡實相者謂如來藏法身之體性不變故佛智具知此實相體窮源底故名爲究盡不但成就有爲萬德無爲萬德佛亦究盡故言無量種成就説不可盡此經脱第六覺體成就如來能知一切法佛自證得故亦少第七隨順衆生意爲説脩行法成就如來能説一切法故此經所言所謂諸法如是相等是此第七所説諸法佛所現見無所不見上來初番論解經中言詞七句已**論**第二番復以七句解種種言詞配此七句云第一種種法門攝取衆生入於佛法故深入無際第二令不散亂住故以教貫衆生令不散亂專心住境希欲聞故遂能種種分別諸法第三令取故令根熟者問取一乘故唱止不須説第四令得解脱故令根熟者皆得解脱故佛成就難解之法第五令彼脩行成就得對治法故令脩行者得於眞際性對治法故能究盡諸法實相第六能令脩行進趣成就故令脩行者進趣成就得淨妙智由此如來能知諸法第七令得脩行不退失故令彼脩行得滿足者復爲他説不失利益故佛能説一切法要由佛自成此七種故能令衆生漸隨所作以論配上經文七句鉤瑣相起如

理應知初四住權次二住實後一外化何故配經方便知見念觀三句作第三番釋也**論**云又與教化成就者依證法故如是次第謂方便者令根未熟可化衆生令依善友其知見者根熟衆生令得解脱其念觀者解脱衆生令成力・家諸功德故。此依次第證法而説教化衆生何故配經言詞七句作第三番説也**論**云依説法説故如是次第如次前説次第可知恐繁不述是故**論**云又與教化成就者依證法故又説成就者依説法故此二種法如向前説**論**云依此二種法有何次第依之而得脩行者問證及説次第而依修行即彼前文句再説應知者前論再説方便知見念觀三種依證次第再解言詞七句次第依説次第故如是次第説既如是依之修學即證次第結前義也勸學者知或此料簡初番別解四句中第二教化成就第四説成就二種差別

(28) ［10］Skt. 30.4-6; Tib. 30.2-5; Chin. 5c11-13.

(29) 704b02-c16:【12】經 所謂諸法至究竟等 賛曰此顯第七句佛所説法依證而説故論引經有五句謂何等法云何法何似法何相法何體法**論**有四釋第一番依捨權就實乘解初説三乘名何等法次於一一乘起種種事説名云何法次依三乘門修行清淨名何似法次明三乘唯一相故名何相法後究竟唯一佛乘無二乘體故名何體法第二番依展轉訓釋法何等法謂有爲無爲法云何法謂因縁非因縁等以因縁生釋有爲非因縁生釋無爲何似法謂常無常法等以常釋非因縁生無常釋因縁生何相法謂生等三相法不生等三相法以有生等法釋前無常以不生等釋常何體法謂五蘊體非五蘊體法五陰即生等非陰非生等第三番但解後三句唯依有爲解其初二句不異於前所以不解**論**云何似法者謂無常有爲因縁法何相法者謂可見相等法何體法者謂五陰能取所取五陰是苦集體故亦是道諦故如**論**可解第四番依説法法用説何等法者謂以名句字身説故云何法者依如來所説之法而説之故何似法者能教化可教化衆生故何相法者依音聲取故謂令聽者依於音聲取所詮法故何體法者假名體法相故雖令依聲取所詮法法性離言故所詮者假名體法非稱法實不令依文便生執著然今經文恐人不解翻譯之家遂依第二展轉訓釋法而釋然少不次以義正之不違聖教若別義釋便是人情非爲聖教如是相如是性合是第一何等法相是有爲性是無爲故如是體者是第五何體法謂五蘊體非五蘊體故合而爲文如是力如是作者合是第三何似法力謂常法常法有力能故作謂無常法有造作故如是因如是縁如是果如是報合是第二云何法因縁果報之中有爲是因縁所生法無爲非因縁所生法建立果義名因成辦報義名縁親得果名因疎得果名縁四果名果異熟名報如是本末是第四何相法生等三相法是末體是事故不生等三相是本體是理故究竟等者重解理本法性究竟也本論牒經更有何等云何何似何相何體佛重以此顯前五義更無別理

(30) ［11］Skt. 30.7-12; Tib. 30.6-10; Chin. 5c14-18.

(31) 704c27-705a3:【13】經 爾時世尊至無能測量者 賛曰下二十一頌分之爲二初十七頌半頌前二妙後三頌半勸發信心顯今説實初中復二初二頌總頌二妙後十五頌半別頌二妙此即初也初一頌總歎法師妙後一頌總歎法妙總歎佛身及所成德法體妙也

(32) ［12］Skt. 30.13-14; Tib. 30.11-12; Chin. 5c19-20.

(33) テキストには「８偈半」とあるが、続く［16］においても、漢文と同じく「９偈半」とあるので、チベット訳者の間違いと思われる。

(34) 705a04-12:【14】經 本從無數佛至難見難可了 贊曰下十五頌半別頌二妙於中分二初十四頌頌法妙後一頌半頌法師妙初中分五初一頌頌讀誦修行二深次一頌頌果行增長功德心快妙心三深次一頌頌無上深次一頌半頌入深後九頌半頌不共二乘住持甚深此初也不頌標文但頌八深本從無數佛受持讀誦甚深也具足行諸道修行甚深由此二故其智慧門難見難了

(35) ［13］Skt. 30.14-31.2; Tib. 30.13-14; Chin. 5c21-22.

(36) 705a13-17:【15】經 於無量億劫至我已悉知見 贊曰此頌果行增長功德快妙心三深由精進勇猛於無量劫行此諸道果行甚深善名遠振增功德心道場得果我悉知見故名快妙心甚深甚深希有法皆成就故

(37) ［14］Skt. 31.1-2; Tib. 31.1-2; Chin. 5c23-24.

(38) 705a18-20:【16】經 如是大果報至乃能知是事 贊曰此頌無上甚深性謂道理相謂事義前脫此文難解法者如來能知今此文有

(39) ［15］Skt. 31.3-6; Tib. 31.3-6; Chin. 5c25-27.

(40) 705a21:【17】經 是法不可示至信力堅固者 贊曰此頌入甚深甚深者佛所說法名字章句意難得故卒難入解故名爲入又佛自住持是深法中故名爲入不同外道雖說諸法自不能入由佛世尊說因緣理唯佛自入餘不能知意趣難解故名入深論云佛自住持不同外道說因緣法甚深故此經云是法不可示言詞相寂滅因緣道理絶語言故諸衆生類無能得解除諸菩薩信力堅固者初地已上得四種證淨信佛法僧戒故能信法妙而未圓證如是二妙故此下云不退菩薩亦不能知不能知者不能圓證非不信知雖見道前比信亦知非證信故既非堅固所以不說

(41) テキストは“gang de ’jig rten gyis mkhyen pa’i phyir rnam par shes pa nas.”とあるが、『法華経』のチベット語訳に“gang dag ’jig rten mkhyen pa’i nyan thos pa”とあることから、後半を訂正して読む。

(42) ［16］Skt. 31.7-8; Tib. 31.7-8; Chin. 5c28-6a1.

(43) 705b06-16:【18】經 諸佛弟子衆至其力所不堪 贊曰下有九頌半頌不共二乘所作住持深中分三初四頌頌聲聞不知二頌頌辟支不知三頌半頌菩薩不知長行但有二乘不知因顯彼不知亦說菩薩不知聲聞不知中分三一頌半總頌一切聲聞不知一頌別頌皆如利根鶩子不知一頌半別顯皆如利根鶩子并餘弟子共度不知此即初也曾近善友諸漏皆盡住阿羅漢此最後身有是三德其智慧力不堪能知

(44) ［17］Skt. 31.9-10; Tib. 31.9-10; Chin. 6a2-3.

(45) 705b16:【19】經 假使滿世間至不能測佛智 贊曰此明世間皆如鶩子利根第一盡情思共度量亦不能知既不知佛智故智慧門難解難入盡音茲引反任也窮也或秦引反本

盡之盡思音息字反無息茲反不爾便與度量無別

(46) ［18］Skt. 31.11-14; Tib. 31.11-14; Chin. 6a4-6.

(47) 705b22-24:【20】經 正使滿十方至亦復不能知 賛曰十方利根皆如鶖子并餘弟子亦滿十方共度亦不知

(48) ［19］Skt. 29.13-14; Tib. 31.14-32.4; Chin. 6a7-10.

(49) 705b25-c2:【21】經 辟支佛利智至莫能知少分 賛曰此頌辟支不知辟支望聲聞名利根鱗角望部行亦名利根亦復不知若未入聲聞決擇分善而作獨覺便成鱗角入決擇分已後作者皆成部行在解脱分未定生時可成鱗角生數多故已定生者亦成部行生數少故

(50) ［20］Skt. 32.5-10; Tib. 32.5-10; Chin. 6a11-15.

(51) 漢文は、「十地上聖」とあり、十地の上方の聖者とある。

(52) チベット訳は、第６の「長時」の訳を欠いている。

(53) 705c03-10:【22】經 新發意菩薩至不能知佛智 賛曰下三頌半菩薩不知中分二初二頌半凡菩薩不知一頌十地上聖亦不能知此初也新發意菩薩具六種德一親近二達義三善説四數衆五一心六長時測度亦復不知刹梵云刹多羅此云田田土也有云國亦云土義譯之耳字書本無此字説文作剟楚乙反刀割物聲黍音七聲也

(54) ［21］Skt. 32.11-12; Tib. 32.11-12; Chin. 6a16-20.
漢文はこのセクションを２つに分けて（6a17, 18-20）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［21］＝【23･24】）。

(55) 705c11:【23】經 不退諸菩薩至亦復不能知 賛曰此地上聖不知或初二頌半七地已前不知初地已上亦名新發意證發十種心故後一頌八地以上不知亦名不退故前門甚深有此八種今第八中歎佛智者顯智深故其門亦深或十五頌半別歎法妙中初六頌歎智門妙准前科配其中末後一頌半頌不共深故次八頌頌歎智深三乘不知佛智慧故准義科頌則可知矣
705c22-26: 705c20-21:【24】經 又告舍利弗至十方佛亦然 賛曰此一頌半頌總歎法師妙無別頌也

(56) ［22］Skt. 32.13-16; Tib. 32.13-16; Chin. 6a21-23.

(57) 【25】經 舍利弗當知至要當説眞實 賛曰下三頌半勸發信心顯今説實中分二初一頌半唯告鶖子顯今説實後之二頌普告二乘顯初方便此初也汝既未證我之所説於我所説當生信心

(58) ［23］Skt. 33.1-4; Tib. 33.1-4; Chin. 6a24-27.

(59) 705c27:【26】經 告諸聲聞衆至引之令得出 賛曰此二頌普告二乘爲二初頌普告至涅槃者後頌顯佛化以三乘之意由處處著著界地故引之令出且説三乘理唯有一此會唯有聲聞極果縁覺即無故言及求縁覺乘聲聞不爾

(60) ［24］Skt. 33.5-7; Tib. 33.5-7; Chin. 6a28-b1.

(61) 706a04-20:【27】經 爾時大衆中至各作是念 賛曰下第二段四衆驚疑發揚鶖子之請有三三度請故佛止亦三止皆居前請皆在後**論**釋三止云初止爲相令問取一乘次止欲令大衆推覓深境渴仰欲聞後止欲令惡人退席至下當知又三請中初挾自他疑故請次陳大衆於餘佛所已植因故請後述自他已從今佛化堪聞故請**論**五段中自下第三大衆定疑分於自所證心生決定於佛所説遂有疑生若依驚疑發鶖子請請既有三文隨三段初止既屬前唱一乘二止攝屬此請文中初請分二初大衆疑後鶖子請**論**説第三定疑分有三云自此以下依三種義示現一決定義二疑義三依何事疑義初二義在大衆疑中依何事疑義在鶖子疑中大衆疑有二初標疑衆後申疑意此初也

(62) ［25］Skt. 33.7-9; Tib. 33.7-9; Chin. 6b1-4.

(63) 706a21-27:【28】經 今者世尊至所不能及 賛曰下申疑意有二初牒所疑縁由後正申定疑此牒佛前所説疑縁由。佛所得法甚深難解者牒佛前説諸佛智慧甚深無量有所言説意趣難知者牒佛前説其智慧門難解難入此二深故二乘不知初是顯上後是接下合名方便何故佛歎此爲疑意

(64) ［26］Skt. 33.9-11; Tib. 33.9-11; Chin. 6b4-6.

(65) 706a28-b15:【29】經 佛説一解脱義至是義所趣 賛曰下申定疑謂到於涅槃已上名爲決定義於自所證有爲無爲果法決定久已無疑而今不知是義所趣名爲疑義謂於前説佛所得法甚深難解有所言説意趣難知中而今不知是所説義何所歸趣意趣如何説何宗趣故名疑義趣音七句七俱二反今從初反謂疑意云若説解脱我已得之又説難知意説何法故**論**云決定義者有聲聞方便證得深法作決定心於聲聞道中得方便及涅槃證故如是二種法示現有爲無爲法故如經爾時大衆中乃至亦得此法到於涅槃言二法者謂方便及涅槃證方便者有爲能證生空智道涅槃者謂無爲所證空理於此能得能修此二中得決定故**論**云疑義者謂聲聞辟支佛不能知故是故生疑如經而今不知是義所趣故

(66) ［27］Skt. 33.12-33.5; Tib. 33.12-34.6; Chin. 6b6-12.
漢文はこのセクションを２つに分けて（6b6-9, 9-12）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［27］＝【30･31】）。

(67) 706b16-29:【30】經 爾時舍利弗至難解之法 賛曰下鶖子請中有二初長行後偈頌長行分二初申疑後請決此初也依**論**下是第三依何事疑義依何事疑義者如來説聲聞解脱與我解脱不異三乘同坐解脱床故是以生疑生疑者生因中疑因謂所由云何如來數數宣説甚深境界前説甚深後説甚深不同聲聞聲聞與佛解脱既等更何不同除此已外不同何法於此所由而生疑惑**大般涅槃**有其三事摩訶般若解脱法身解脱雖同般若法身即是佛之智慧性相一乘果體彼所未得四衆不解所以生疑如經爾時舍利弗乃至而説偈故何因者何道理所以何縁者何事縁由緒諸佛第一之方便此爲總句下別顯此甚深微妙即佛智慧難解之法即智慧門牒前二故此中疑者是法執類異熟生攝
706c1-6【31】經 我自昔來至難解之法 賛曰此請決牒自既未聞四衆疑起故願佛説

敷施演説也

(68) ［28］Skt. 34.6-8; Tib. 34.7-9; Chin. 6b12-16.

(69) 706c07:【32】經 爾時舍利弗至不可思議法 賛曰十一行頌中分四初三頌半頌前問中稱歎諸佛第一方便甚深微妙難解之法三頌頌前四衆咸皆有疑一頌半頌我自昔來未聞自疑三頌頌請唯願世尊敷演斯事初中分三一頌半頌前佛自告申如來知見廣大深遠無量無礙等法師妙一頌頌前所得難解所説難知法妙也一頌合頌歎法及法師妙無問而自説此初也慧日大聖尊者以佛智慧猶如日故**涅槃經**言譬如日初出光明甚暉炎既能還自照亦滅一切暗佛之二利亦復如是**増一阿含經**説日出有四事一者日出之時衆暝皆除二農夫作務三百鳥悉鳴四嬰兒啼哭佛告諸比丘若日出時衆暝除者喩佛出世除去癡暝靡不照明農夫作務者人民之類普共田作此譬檀越施主隨時供給衣服飲食床㡏臥具病縁醫藥百鳥鳴者譬如高徳諸法師等能爲四衆説微妙法嬰兒啼哭者此喩弊魔見佛出世心大愁惱亦如經中讃佛偈言如來金色如山王亦如日出照世間能拔衆生長夜苦故我頂禮三界王故今讃佛云慧日也久乃説是法者成道多年不曾顯説今方説之故云久也此上二句標下一頌頌佛前説種種念觀

(70) ［29］Skt. 34.9-11; Tib. 34.10-12; Chin. 6b17-18.

(71) 707a03-7:【33】經 道場所得法至亦無能問者 賛曰上半頌頌前所得難解菩提涅槃智慧甚深後半頌頌前所説難知智門甚深以二乘不知故皆無能問者

(72) ［30］Skt. 34.11-35.4; Tib. 34.12-35.4; Chin. 6b19-26.
漢文はこのセクションを２つに分けて（6b19-20, 21-26）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［30］＝【34･35】）。

(73) 707a07-9:【34】經 無問而自説至諸佛之所得 賛曰上半合頌歎二妙無問自説從三昧起便即告故第三句法妙第四句法師妙
707a10-15:【35】經 無漏諸羅漢至願佛爲解説 賛曰下三頌四衆疑有二初一頌頌聲聞無學有學之疑二頌頌縁覺等衆願佛説疑喩如網羅生難出猶豫者説文隴西謂犬子爲猶猶性多豫在人前故凡不決者謂之猶豫爾雅云猶如麂善登木郭璞云健上樹也

(74) ［31］Skt. 35.5-8; Tib. 35.5-8; Chin. 6b27-29.

(75) 707a16-22:【36】經 於諸聲聞衆至爲是所行道 賛曰此頌自疑自先得智爲是果法爲是因道若是果者所得已滿今何所讃若是因者更欲趣求因所成故前説衆人於自所得生決定心於佛説疑今者鶖子無決定義於自所得亦生疑惑又前剏聞於自猶定今重思慮於自所得亦有疑生故不相違

(76) ［32］Skt. 35.9-14; Tib. 35.9-14; Chin. 6c1-6.
漢文はこのセクションを２つに分けて（6c1-2, 3-6）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［32］＝【37･38】）。

(77) 707a23-26:【37】經 佛口所生子至時爲如實説 賛曰下頌請説分二初一頌頌聲聞弟子請後二頌頌餘衆請此初也禀佛言教聖道方起教從口出故名口生簡異胎藏精血成

故

707a27-29:【38】經 諸天龍鬼神至欲聞具足道 賛曰頌餘衆請此土佛出無轉輪王故説諸國轉輪王至具足道者大乘理故

(78) ［33］Skt. 36.1-3; Tib. 36.1-3; Chin. 6c7-8.

(79) この注釈書は、『法華論』のことである。T. 1519, 6c05-7: 自此以下次依示現四種事説一者決定心二者因授記三者取授記四者與授記應當善知 . T. 1520, 16a15-16: 自此已下依四種事説一者決定心二者因受記三者取受記四者與授記應知

(80) 707b01-708a4:【39】經 爾時佛告至皆當驚疑 賛曰下第二段有二初止後請此止也論下第四解定記分記謂記別分明記別深密之義名爲記別即十二部經中名記別經記別經有三一記弟子謝往過去德失差別二授諸大人成佛記別三分明記別深密之義如下十二分教章中具説此即第三記別經也論云自下依四種事説一決定心二因授記三取授記四與授記決定心者佛心本來已有決定所爲之人由此便有後止及説是以決定心論不配屬經通下文意故論云云何決定心已生驚怖者令斷驚怖爲利益二種人故如來有決定心驚怖有五一損驚怖如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來説言阿羅漢究竟涅槃我畢竟取如是涅槃是故阿羅漢不入涅槃此即決定種姓聲聞聲聞者所聞教聲取之以證究竟實果我畢竟已取如是涅槃果已究竟謗無大乘不堪聞今爲説大乘若聞今説彼非究竟即驚疑阿羅漢皆畢竟無入涅槃者反道疑生故名爲損二多事驚怖以大乘衆生生如是心我無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦生驚怖心起取異乘心故謂不定姓地前菩薩住大乘中已經多劫行菩薩行名爲多事恐彼起心退趣異乘故今爲説令其不退三顛倒驚怖分別我我所身見不善法故謂根未熟定姓凡夫煩惱尤重不堪爲説若爲説者更生煩惱顛倒驚怖四悔驚怖謂若爲説大德舍利弗我不應證如是小乘法自止小果歸向大乘即以悔心名爲驚怖五誑驚怖謂若爲説増上慢者作如是説云何如來誑於我等自謂道滿更無餘故聲聞有二一定姓二不定姓凡夫有二一未得謂得二具重煩惱菩薩有二一退位二不退位定姓聲聞即損驚怖不定姓聲聞即悔驚怖未得謂得凡夫即誑驚怖具煩惱凡夫即顛倒驚怖退位菩薩即多事驚怖不退位菩薩非此五中捨權就實欣趣佛位方爲説一乘故此説一乘不逗彼器論云正爲利益二種人故如來有決定心謂多事及悔利益悔者引攝一類故利多事者任持所餘故今此唱止及下正説佛心先定爲此二人餘非正爲即是十義説一乘中初二義也觀此文意多事一種不説有驚説即無驚自餘四種説即有驚不説無驚故論總言已生驚怖令斷驚怖因授記者如經止止不須復説乃至天人皆當驚怖即下二止文等是因應爲聞者之二義不堪爲聞者之退席故名爲因因授記皆生驚怖有三種義一欲令大衆推覓甚深境界故二欲令大衆生尊重心畢竟欲聞故此上是應爲聞者之二義三爲令増上慢者離法座而去故即是不堪爲聞者之退席今此第二止但爲應爲聞者之二義第三止方爲不堪聞法之退席其取授記如經爾時世尊下即許可攝受許當爲説是與授記者如經佛告舍利弗下正爲解釋一乘等是定記四中初決定心唱止及爲説之所由次因授記但是止其請之所由取記許爲開釋

與記正示陳説今言驚疑令爲應聞者驚張疑惑推覓深法尊重欲

(81) ［34］Skt. 36.4-5; Tib. 36.4-5; Chin. 6c8-9.

(82) 708a05-7:【40】經 舍利弗至唯願説之 賛曰。下第二請論云示現過去無量佛已教化衆生初長行後偈頌長行有二一總請二堪聞此請也

(83) ［35］Skt. 36.5-7; Tib. 36.5-8; Chin. 6c9-12.

(84) 708a08-10:【41】經 所以者何至即能敬信 賛曰。此堪聞有三因一遇良縁曾見諸佛二性聰叡諸根猛利三解識眞義智慧明了故能聞信

(85) ［36］Skt. 36.8-10; Tib. 36.9-11; Chin. 6c12-15.

(86) 708a11-12:【42】經 爾時舍利弗至有能敬信者 賛曰此頌可知

(87) ［37］Skt. 36.11-37.2; Tib. 36.12-37.2; Chin. 6c16-18.

(88) 708a13-22:【43】經 佛復止舍利弗至將墜於大坑 賛曰下第三段初止後請止中有二長行及頌此初也因不堪聞法者之退㡿也恐増上慢得世第四静慮便謂阿羅漢果而生誹謗當墮地獄名墜大坑此皆凡夫故墜大坑非聖有學**瑜伽論**説一切聖人知自得果無自謂得後位聖果増上慢故無邪見故更不造業入地獄故諸論所言増上慢比丘得世第四静慮後命終已由謗解脱起邪見故生地獄中即此類也

(89) ［38］Skt. 37.3-11; Tib. 37.3-11; Chin. 6c18-24.
漢文はこのセクションを２つに分けて（6c18-20, 21-24）注釈を行っているが、チベット語訳は引用文も１つにまとめている（［38］＝【44･45】）。

(90) 708a23-25:【44】經 爾時世尊至聞必不敬信 賛曰法妙難解下愚聞之起謗既不敬信所以恐墜大玩
708a26-b1:【45】經 爾時舍利弗至多所饒益 賛曰下第三請初長行後偈頌長行有二初總請後堪聞鶖子利根自知宿命亦能曉他往世從釋迦已曾受化根成道滿聞必能信生死長夜安穩饒益故今請説

(91) ［39］Skt. 38.1-3; Tib. 38.1-3; Chin. 6c24-27.

(92) 708b02-9:【46】經 爾時舍利弗至唯垂分別説 賛曰下四頌中有三初一頌自稱長子以請決次一頌半陳衆久從佛化以請説後一頌半兼陳自他聞法悟解即生歡喜以請説此初也佛於二足多足無足一切中尊今云兩足尊於三類中兩足爲貴能入道故謂人天類佛亦兩足故言兩足尊聲聞衆中鶖子第一故名長子

(93) ［40］Skt. 38.4-5; Tib. 38.4-5; Chin. 6c28-7a1.

(94) 708b10-11:【47】經 是會無量衆至欲聽受佛語 賛曰此一頌半陳衆久從佛化宿因今熟故請佛説

(95) ［41］Skt. 38.6-7; Tib. 38.6-7; Chin. 7a2-4.

(96) 708b12-13:【48】經 我等千二百至則生大歡喜 賛曰此一頌半兼陳自他聞法歡喜以請佛説

(97) ［42］Skt. 38.8-11; Tib. 38.8-11; Chin. 7a5-7.

(98) 708b14-26:【49】經 爾時世尊至分別解説 賛曰**論**第四段定記分中自下第三取授記也許可攝受而爲説之故**論**云取受記者以舍利弗等欲得受記如經佛告舍利弗汝已三請豈得不説等許攝受取故若依自科下第三段開斯實相啓彼權門於中有二初明二記後五濁下方破四疑二記爲二初取記中有二初許可攝受後惡人退席此初也**菩薩地**云夫聽法者聆音囑耳掃滌攝持**智論**亦言聽者端視如飢渴一心入於語義中踴躍聞法心悲喜如是之人可爲説端直審也若不誠彼群情令其審聽恐心不定慧解不生故勅審聽

(99) ［43］Skt. 38.12-14; Tib. 38.12-14; Chin. 7a7-8.

(100) 708b27-29:【50】經 説此語時至禮佛而退 賛曰下惡人退席有四一明去二不止三快勅四敬諾初中復二初標後釋此標也

(101) ［44］Skt. 38.14-39.1; Tib. 38.14-39.1; Chin. 7a8-10.

(102) テキストには“rnams snga”とあるが、“rnam lnga”と読む。

(103) 708c01-709b7:【51】經 所以者何至是以不住 賛曰下釋起去所由此自徵云難得有五一得人身難二生中國難三具諸根難四値佛出難五聞正法難五千之徒已具初四何故將説妙法避席而起去耶此去之所以者何謂也今釋有二意一罪根深重二有増上慢此輩者補配反群黨也説文軍法發車百兩爲一輩廣雅等翻輩亦類也玉篇部比類也罪者可毀可嘖可怖可厭之義若因若果可毀厭者皆名爲罪若依小乘此罪衆多重者有三一煩惱障二業障三異熟障一切煩惱總爲二類一數數起名勤二起而猛名利分爲四句一勤而不利二利而不勤三亦勤亦利四不勤不利今取初及第三句名煩惱障五無間業名業障三途八難名異熟障此之三障障入聖道名爲重罪今依大乘障有二種一煩惱障二所知障所知障者隨其所應障入大乘聖位煩惱障者隨其所應障入三乘聖位依佛地論煩惱障有三一者一百二十八煩惱并隨煩惱二所發業三所得果此意所説是彼品類總名爲障非據重者依大般若重障有四一煩惱障二業障三異熟障四法障煩惱障者一百二十八根本煩惱及彼等流諸隨煩惱隨其所應能障聖者皆名此障若具有者隨其所應障彼聖故業障者依薩遮尼乾子經有五種逆一破塔壞寺焚燒經像竊盗及用三寶財物二謗三乘法言非聖法障礙留難隱弊覆藏三於一切出家人所若有戒無戒持戒破戒打罵訶責説其過失禁閉牢獄或脱袈裟逼令還俗責役駈使債其發調斷其命根故**大集經**言説一破戒比丘過失過出萬億佛身血四殺父害母殺阿羅漢出佛身血破和合僧五起大邪見謗無因果長夜常行十不善業此之五種唯於大乘名五逆業障亦有説七等不過此五。所以不説異熟障者謂能障聖道諸異熟果即三惡趣八無暇等其間佛前佛後難應云法前法後是佛法前後不得聖故法障者謂於宿世障他作善造匱法業於此生中不得聞法匱乏正法謂五果中等流増上二果所攝罪根深重者感匱法業是罪根故現不聞法是罪體故即第四障也慢者玉篇輕悔也不畏也倨也或爲嫚字切韻欺爲謾緩爲慢恃己陵他高擧爲相**瑜伽**等説慢有七種一慢二過慢三慢過慢四我慢五増上慢六卑慢七邪慢初慢者謂於劣計己勝或於等計己等過慢者謂於等計己勝或於勝計己等慢過慢者謂於勝計己勝我慢者恃所執我高擧爲相増上慢者己實少德謂己多德卑慢者謂

他多分勝己計己少分劣他邪慢者己全無德謂己有德今增上慢即是第五已實少德謂己多德得世間涅槃禪定等故未多得謂多德未多證謂多證。得謂有爲道證謂無爲滅此是增上慢相非全未得而今謂得若不爾者便非增上慢相乃是第七邪慢相故有此煩惱障及前法障二種力故不堪聞法問五千之輩既不堪聞何因目矚神光耳聆妙唱覩天華而晏默觀地動而無驚答放光動地未革庸心演妙宣難便乖淺意聞序中之問答爲大漸之初因聽宗内之深陳乃增迷而復謗所以折摧枝葉扇拂糟糠

(104) [45] Skt. 39.2; Tib. 39.2; Chin. 7a10-11.

(105) 709b08-15:【52】經 世尊默然而不制止 贊曰二不止也默靜也俗作默諸論皆云有二決定佛力不非一受異熟決定二作業決定罪根深重者受果定類增上慢者作業定類由此五千從座而起佛雖神力亦不止之又乍可令去不墜大坑不可止之令興重業故不止也彼若發心定業可轉其心不易佛力不排

（本研究は科学研究費補助金基盤研究Ⓒ（課題番号16K02161）による成果の一部である）